# メメッドの心理と村人の視線にみる「選ばれし者」
## ―ヤシャル・ケマル『インジェ・メメッド』

外国語学部
南・西アジア課程　トルコ語専攻
2005 年度卒業論文

8500044
蔵澄　千賀子

40 字×30 行

目次

序論・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

第 1 章　作家紹介・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6

1.1.　　生涯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6

1.2.　　作風・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10

1.3.　　『インジェ・メメッド』の動機―「選ばれし者」への興味・・・・・・・・・・12

第 2 章　構成にみるヤシャル・ケマルの工夫・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14

2.1.　　物語章・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14

2.2.　　物語の終わり方・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14

2.3.　　自然描写・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・17

第 3 章　メメッドの心理と村人の視線・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18

3.1.　　メメッドの心理・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18

3.2.　　村人の視点・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・43

結論・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・71

参考文献・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・75

## 序論

ヤシャル・ケマルはチュクロヴァ[1]の作家である。自身もチュクロヴァに生まれ育ち、チュクロヴァを舞台にした作品を世に送り続けてきた。ヤシャル・ケマルは、自身をチュクロヴァの過去を知る人物として、チュクロヴァが 20 世紀に経験した大きな変化を書いてきたと語っている。[2]

チュクロヴァはトルコにおける資本主義の発展や経済の変化の影響にさらされた最初の地域である。19 世紀後半綿花をはじめとする農業生産物が世界市場に開放され、この地域に外国資本が入ってきたことが、経済や社会の変容の原因となる。政府による遊牧民の強制的な定住化政策、土地の特権層への集中、それが最終的にはまた別の封建制度を成立させたこと、小作人の都市への流入、土地を失った農民たちのプロレタリア主義への傾倒、さらにはマーシャル・プランによって援助された農業地における機械化、これらが 1950 年代以降、チュクロヴァの状況を一変させた。

ヤシャル・ケマルも、このチュクロヴァの変容を実際に経験した者として、変容がチュクロヴァの社会にもたらした問題を作品に取り上げた。村人が綿花畑で酷使されていること、劣悪な生活環境により病気が蔓延していること、村人は社会的不正の犠牲者であること、生きるために自然やアーの権力に立ち向かう必要があることなどを描いてきた。しかし、このように社会の不均衡を批判する一方で、ヤシャル・ケマルはチュクロヴァの豊かな内面世界も描く。村人たちの内面世界、つまり口承の伝統が何世紀も伝えてきた民衆文化、チュクロヴァに伝わる民話や民謡、ことわざなど、チュクロヴァに生き続ける豊かな内面世界である。[3]ヤシャル・ケマルが作品に創り出す、チュクロヴァのこの豊かな内面世界こそが、彼をヤシャル・ケマルとするものであり、彼にチュクロヴァの作家という称号を与えたのである。

チュクロヴァの作家という称号の通り、ヤシャル・ケマルに関する研究は、彼の作品にみられるチュクロヴァの内面世界を研究したものが目立つ。つまり、フォークロアの観点（伝説、民謡、挽歌、民話、物語）から研究したものが大半を占める。これまでなされてきた主な研究に関しては、1981 年にペンシルバニア大学中東センターから出版された、

---

[1] アナトリア南部の大平原
[2] Nedim Gürsel. *Bir Geçiş Dönemi Romancısı*. İstanbul: Everest Yayınları, 2000, p.25
[3] Nedim Gürsel, p.26

*Edebiyât* 誌のヤシャル・ケマル特集号[4]、ビルケント大学主催で 2002 年に行なわれた国際ヤシャル・ケマルシンポジウムの報告書[5]において知ることができる。日本語では、『インジェ・メメッド』*İnce Memed*[6]について考察されている、小山晧一郎の論稿[7]がある。

本稿では彼の代表作『インジェ・メメッド』シリーズ四部作を取り上げる。この作品は、主人公のメメッド少年が義賊となり、村人に対し不正を繰り返す権力者を次々と殺害し、村人によって英雄化される物語である。シリーズ第 1 巻である『インジェ・メメッド』は 1955 年、『インジェ・メメッドⅡ』*İnce Memed2*[8]は 1970 年、『インジェ・メメッドⅢ』*İnce Memed3*[9]は 1984 年、シリーズ最終巻である『インジェ・メメッドⅣ』*İnce Memed4*[10]は 1987 年に出版された。32 年間に及ぶ大作であるが、ヤシャル・ケマルが情熱をそそぐことができたのは、彼があるテーマにとらわれていたことによる。そのテーマとは、彼が言うところの「選ばれし者(mecbur adamı)」[11]である。なぜこのテーマが挙げられるかについては、ヤシャル・ケマルがネディム・ギュルセル（Nedim Gürsel）と行った対談が参考となった。この対談においてヤシャル・ケマルは、彼が「選ばれし者」に興味をもつようになった過程について語っており、この「選ばれし者」について『インジェ・メメッド』で深く掘り下げたかったと述べている。[12]また、アラン・ボスク（Alain Bosquet）との対談においても、この「選ばれし者」について言及しており、「選ばれし者」というのは彼が考えるところの、生まれながらにして反乱をおこすよう選ばれて（定められて）いる者で、そんな彼らが歴史をつくってきたと述べている。[13]ヤシャル・ケマルが「選ばれし者」に

---

[4] *Edebiyât: The Journal of Middle Eastern Literatures* 5:1-2. Middle East Center, University of Pennsylvania, 1980

[5] Süha Oğuzertem(Ed.). *Geçmişten Geleceğe Yaşar Kemal: Bilkent Üniversitesi Türk Edebiyatı Merkezi Uluslararası Yaşar Kemal Sempozyumu*. İstanbul: Adam Yayınları, 2003　この他、ヤシャル・ケマルの言葉についての研究書には　Ali Püsküllüoğlu. *Yaşar Kemal Sözlüğü*. İstanbul: Toros Yayınları, 1994　がある。

[6] Yaşar Kemal. *İnce Memed1*. İstanbul: Adam Yayınları, 2002（Onikinci Basımı）

[7]小山晧一郎「アナトリアの山賊（eşkiya）―『インジェ・メメット』（*İnce Memed*）をめぐって―」『内陸アジア・西アジアの社会と文化』護雅夫編　山川出版社、1983 年

[8] Yaşar Kemal. *İnce Memed2*. İstanbul: Adam Yayınları, 2002 (Dokuzuncu Basımı)

[9] Yaşar Kemal. *İnce Memed3*. İstanbul: Adam Yayınları, 2003 (Dokuzuncu Basımı)

[10]Yaşar Kemal. *İnce Memed4*. İstanbul: Adam Yayınları, 2003 (Onuncu Basımı)

[11] mecbur adamı の日本語訳については、「運命づけられた者」、「定められし者」とも考えられるが、本稿では「選ばれし者」と訳した。

[12] Nedim Gürsel, pp.107-109.

[13] Yaşar Kemal. *Yaşar Kemal Kendini Anlatıyor: Alain Bosquet ile Görüşmeler*.

ついて言及したのは、上に挙げた対談 2 回のみで、『インジェ・メメッド』は他のヤシャル・ケマル作品同様、チュクロヴァの内面世界に注目される形で研究されてきた。『インジェ・メメッド』において、ヤシャル・ケマルが掘り下げて描こうとした「選ばれし者」については、研究がほとんどなされてこなかったのである。

そこで、本稿では、その「選ばれし者」に注目したい。「選ばれし者」については、フェトヒ・ナジ（Fethi Naci）[14]が第 3 巻については言及しているが、全 4 巻にわたり「選ばれし者」について研究されたものはない。よって、本稿では全 4 巻通して「選ばれし者」がどう描かれているのかを明らかにしていく。論文の具体的な構成は以下の通りである。第 1 章ではヤシャル・ケマルの人生、ヤシャル・ケマルの作風、「選ばれし者」への興味について触れる。第 2 章では、『インジェ・メメッド』に見られる構成上の工夫を考察する。第 3 章では、主人公インジェ・メメッドと、集団としての登場人物である村人（ときに群集）を考察する。結論では、第 3 章を踏まえ、「選ばれし者」メメッドを描くために、主人公インジェ・メメッドと村人がどう使われたのかを明らかにする。

ここで、全 4 巻の粗筋を簡単にまとめておく。この物語時代設定は第 6 版に書かれた題辞によれば 1925-33 年のあいだ[15]とされている。物語の大筋は、第 1 巻で英雄メメッドが出現する形となり、第 2 巻ではメメッドは自身が第 1 巻で行った行為について悩みはじめる、続く第 3 巻で義賊行為をやめる決意をし、第 4 巻では再び義賊となりチュクロヴァ最大の権力者アリフ・サイム・ベイを討つ、というものである。巻ごとの粗筋は次に示すとおりである。

I

メメッドは、自身の恋人ハッチェがアブディー・アーの策略により甥と婚約させられたと聞き、ハッチェを略奪する。アブディー・アーにけがを負わせ、甥を殺害する。メメッドはデリ・ドゥルドゥの賊に加わる。同じくデリ・ドゥルドゥの賊にいたジャッバル、チャウシュと共に賊を離れる。メメッドはアブディー・アーを殺害し、村人にとっての救世主となる。

---

İstanbul: Adam Yayınları, 2003, pp.159-162. 以後 *Kendini Anlatıyor* とする。

[14] Fethi Naci. *Yaşar Kemal'in Romancılığı*, İstanbul: Adam Yayınları, 1998, pp.9-10.

[15]小山晧一郎、p. 717.

Ⅱ

死んだアブディー・アーの後を、弟ハムザが相変わらず支配し続ける。「アブディーが去ったが、ハムザがやってきた」ハムザが去ってもまた新たな抑制者が登場するはずだ、そうメメッドは自身の行為を疑い始める。メメッドは土地を手に入れるためワイワイ村を搾取するアリ・サファ・ベイとハムザを殺害し、村人にとっての英雄となる。

Ⅲ

「インジェ・メメッドひとりいなくなっても、千人のインジェ・メメッドがやってくる」そう考えるようになったメメッドは、義賊をやめる決心をする。チチェクリデレ村の村人たちがメメッドを擁護したのに怒ったマフムート・アーは、村人たちの土地を奪取する。これに不正義を感じたメメッドはマフムート・アーを殺害する。

Ⅳ

義賊をやめたメメッドは地中海の町でセイランらと暮らしはじめる。親交を深めたゼキ・ネジャドがシャキル・ベイに殺害されたことを知ると、シャキル・ベイを討ち、再び山に入る。そのころ、アリフ・サイム・ベイはメメッドを捕まえようと、村々を荒らしては村人を追放していた。メメッドはアリフ・サイム・ベイを殺害し、山に入る。その後のメメッドの消息は分からない。

## 第 1 章
## 作家紹介

この章では、ヤシャル・ケマルの生涯、彼の作風、『インジェ・メメッド』の執筆動機を見ていきたい。生涯については、主に次の 3 冊、アルパイ・カバジャル（Alpay Kabacalı）による伝記本[16]、アレン・ボスクによるヤシャル・ケマルとの対談本[17]、*Tanzimat'tan Bugüne Edebiyatçılar Ansiklopedisi,* [18]を参考にした。また、作品名の邦訳は『トルコ近代文学の歩み』[19]、及び『集英社世界文学大事典』（1996）を参考にした。

### 1.1.生涯

ヤシャル・ケマル（本名ケマル・サドゥック・ギョクチェリ　Kemal Sadık Gökçeli　）は 1923 年[20]にアダナのヘミテ（Hemite）に生まれた。父のサドゥックはワン湖近郊のエルニス村（現在のギュンセリ村）出身で士族の家系の生まれである。一方、母ニガールは兄弟が全員義賊[21]という環境に生まれ、家族はトルコとイラン国境辺りに代々暮らしてきた。両親ともにクルド人である。第一次世界大戦下、1915 年にロシア軍がワンを占領すると、両親は南東アナトリアを転々とし、ヘミテ村に落ち着く。

ヤシャル・ケマルは幼少の頃は、家庭ではクルド語を用い、外ではトルコ語を使っていた。家には両親の他に父の兄弟、その妻、親戚の女の子がいた。彼は幼少時代 2 つの不幸な事件を経験している。３歳で不慮の事故により右目を失明し、４歳で父親を失った（モスクでお祈り中、目の前で殺された）。父親の死後、母は一緒に住んでいた父の弟と結婚する。家庭の経済状況はひどく、ヤシャル・ケマルは農園で働くことを余儀なくされた。

その頃、村にはオザン（ozan）やアーシュック(aşık)がよくやってきていた。ある夜、村にアーシュック・アリがやってきて、ヤシャル・ケマルはアーシュックと一緒に歌の掛

---

16 Alpay Kabacalı. *Bir Destan Rüzgarı*. İstanbul: Sel Yayıncılık, 1997

17 *Kendini Anlatıyor*

18 *Tanzimat'tan Bugüne Edebiyatçılar Ansiklopedisi,* Yapı Kredi Yayınları, 2001, pp.1075-1079

19保科眞一、pp.156－165.

20 身分証明書では 1926 年となっているが、ヤシャル・ケマルは後に 1923 年と修正する。ただ 1923 年で正しいかどうかは本人も確かではない。

21 ヤシャル・ケマルは義賊であった伯父の英雄伝に影響を受け、小説にもモチーフとして登場させている。

け合いをする。歌い終えるとそのアーシュックはヤシャル・ケマルに対しこう言った。「この年でこれほどの実力なら、カラジャオーランのようになるよ」この言葉を聞き、ヤシャル・ケマルはひどく喜ぶ。母親は息子が詩に傾倒することをよく思っていなかったが、ヤシャル・ケマルは詩を暗記し歌い、自ら創作することに楽しみを見出していた。

ヤシャル・ケマルはカディルリ（Kadirli）小学校を卒業すると、中学へ進むべきか、吟遊詩人の道を進むべきか迷う。結局中学に進むことを決めると、ヤシャル・ケマルの家の経済状況が厳しいことを知っていた先生は村中からカンパを集める。しかし、ヤシャル・ケマルは受け取ることを拒み、伯父に言われた通り雄牛を売ってお金を作り、そうして得たお金を手にカディルリ村から 105 キロメートル離れたアダナへと歩いて向かった。アダナでは工場に住み込みで働きながら中学校に通った。

中学校を３年次で中退すると、職を転々とする。綿花栽培農園での季節労働者（1941）、アダナ人民の家（Halkevi）ラマザンオール図書館で清掃員（1941）、カディルリのバフチェ村で教員（1942-43）、トラクターの運転手、水田で水監視員など 20 近くの職を転々とした。しかし、どれも長続きせず、一番長続きしたものは水田での水監視員で、５年続いた。彼の仕事が長続きしなかったのは、社会主義的行動が警察や憲兵にマークされていたためであった。彼は中学２年生の頃からアダナの社会主義者と関わりを持っており、お尋ね者リストに名前があった。1943 年、17 歳のときには政治的理由で逮捕され、警察署で 10 日間拘束された。

幼少の頃から民謡や民話に強い関心を示してきたヤシャル・ケマルは、16 歳の頃にはフォークロアを収集し始める。彼の最初のフォークロア集である『挽歌』*Ağıtlar* は 1943 年に出版されている。また、1940 年代アダナで出版されていたチー（çiğ）誌と関係していた作家や知識人たちと交流を持ち、特に作家であり画家でもある、アブディン・ディノ（Abdin Dino）やその兄アリフ・ディノ（Arif Dino）と親しくしていた。彼らとの出会いはヤシャル・ケマルの文学世界を広げた。彼らに教わった、読むべき世界文学を、当時住み込みで働いていたラマザンオール図書館でむさぼるように読んだ。ここでヤシャル・ケマルは、ホメロス、ギリシア古典、19 世紀の文学と出会う。

1944 年、兵役に就くと、カイセリにある軍病院にまわされた。この病院は全く使われておらず、仕事がなかったので、ヤシャル・ケマルはカイセリ近くの町タラス(Talas)に送られた。タラスでは大学を卒業した２人の兄弟と知り合い、彼らの別荘で残りの２年間を過ごすこととなる。別荘には多くの書物があり、ラマザンオール図書館に続いて、ここで

もヤシャル・ケマルは文学上の教養を得る機会に恵まれる。翻訳された全てのドフトエフスキー、チェーホフ、トルストイ、トルコの古典、『千夜一夜物語』、ヨーロッパの古典などを読む。彼の最初の短編は「汚れた物語」”Pis Hikaye”で 1946 年、23 歳で兵役中に執筆された。

除隊後の 1946 年、ヤシャル・ケマルはイスタンブルに行き、フランス資本のガス会社でガス管理員として働き始める。1948 年にはカディルリに戻り、しばらく水田で水監視員として働く。短篇を書き始め、アダナで 1948 年に短篇「赤ん坊」”Bebek”[22]を、続いて 「店主」”Dükkancı”を発表する。

1950 年、トルコ共和国刑法第 142 条における反体制運動への参加の罪で逮捕され、しばらくコザン刑務所に収監される。彼はこの刑務所で、人生で初めて拷問を受け、この拷問はトラウマとして残った。1951 年に釈放されると、職を求めてイスタンブルに行く。この年、『塚にあるザクロの木』*Hüyükteki Nar Ağacı* という短い小説を執筆する。イスタンブルではジュムフリエット紙にルポルタージュ記者として入社する。1951 年にはワンを、1952 年にはアールダーウ（Ağrıdağı）をルポルタージュの仕事のため旅行する。

1952 年にヤシャル・ケマルはティルダ・セレロ（Thilda Serero）と結婚する。彼女は英語、フランス語、スペイン語を話し、外国のエージェントで働いていた。小説で稼げない時期は、妻のティルダが働き生活を支えていた。1952 年に短篇「赤ん坊」“Bebek”を含む『黄色の灼熱』*Sarı Sıcak* が出版される。ヤシャル・ケマルが語るところによれば、彼の頭の中には常に『インジェ・メメッド』の構想があったという。この構想を現実とするため、お金を前借りし『インジェ・メメッド』を書き始める。1953 年冬のことだった。ヤシャル・ケマルは『インジェ・メメッド』を三ヶ月で書き上げ、1955 年に出版された。

彼は『インジェ・メメッド』を発表した後、しばらく何も書けないでいた。1962 年にはトルコ労働者党に入党し、政治活動に傾倒し始める。党内でかなりの要職を務め、トルコ各地を演説して回った。1963 年には新聞記者を辞め、小説を執筆することに専念し始めるが、政治活動に忙しく執筆する時間は取れなかった。

1967 年には労働者党の見解を守る目的で週刊誌『宣言』（Ant）をフェトヒ・ナジと共に創刊する。しかし、1969 年 8 月ソ連によるチェコスロヴァキア侵攻、プラハの春への軍事介入に対する労働者党内での思想の不一致をきっかけに、ヤシャル・ケマルは Ant 誌を去る。この頃から政治活動にピリオドを打ち、創作活動に入りたい欲求が高まっていた。

---

[22] 「赤ん坊」は 1951 年にジュムフリエット紙で連載された。

この揺れた時期に何とか世に出すことができた作品は『アララット山伝説』*Ağrıdağı Efsanesi* (1970)だった。 1971 年には、シリーズ化される『トロス山脈伝説』*Binboğalar Efsanesi* の執筆に取り掛かる。

ヤシャル・ケマルは、それまでの沈黙を破るかのように、『チャクルジャのエフェ』*Çakırcalı Efe* (1972)、『鍛冶屋街殺人事件』*Demirciler Çarşısı Cinayeti*(1973)、『ユスフジュクのユスフ』*Yusufcuk Yusuf*(1975)、『カモメのサガ』[23]*Al Gözüm Seyreyle Salih*(1976)、『蛇を殺すなら』*Yılanı Öldürseler*[24]*(1976)*、『象のスルタンと赤いひげをした蟻のトパル』*Filler Sultan ile Kırmızı Sakallı Topal Karınca*(1977)、『鳥たちも去った』*Kuşlar da* Gitti(1978)、『アッラーの兵士たち』*Allahın Askerleri*、『海は怒った』*Deniz Küstü*(1978)と、次々と小説を発表する。1970 年代は大体年に 1 冊のペースで本を執筆していた。1973 年にはトルコ作家組合の創設メンバーに加わり、1974－75 年は会長を務めた。

1970 年代半ば、トルコでは 「右派・左派の対立」の名のもと、テロが潜伏し始めていた、テロは知識人や作家にも向けられた。ヤシャル・ケマルも他の作家と同様、望まない形でトルコを離れざるを得なかった。1978 年 10 月、彼は妻ティルダとともにパリに向かう。ヤシャル・ケマルはパリで『誰も/雨の鳥』*Kimsecik/Yağmurcuk kuşu* を執筆し始めるが、たった 45 ページしか書けないでいた。 4 ヶ月後、彼らはスウェーデンに移り、この地で『誰も/雨の鳥』を完成させる。翌年、『誰もⅡ/城門』*Kimsecik Ⅱ/Kale Kapısı* を書き始めるが、執筆速度は落ちる。この小説は子供時代をテーマにしたものだったからか、彼はトルコを懐かしむようになる。『インジェ・メメッド』の続きも気になっていた。1980 年 9 月 12 日クーデターさえも彼をスウェーデンにとどまらせることは出来ず、ヤシャル・ケマルはトルコに戻る。

トルコに戻った彼は、1984 年に『インジェ・メメッドⅢ』、85 年に『誰もⅡ/城門』、87 年に『インジェ・メメッドⅣ』を、そして 91 年に『誰もⅢ/血の声』*KimsecikⅢ/Kanın Sesi* を発表する。1995 年にドイツ語紙 *Der Spiegel* へ寄せた寄稿文が元でイスタンブル国家治安裁判所において裁判にかけられ、20 年の刑を言い渡されたが刑の執行は延期された。最新作は、「ある島の物語三部作」'Bir Ada Hikayesi'、『ユーフラテス川、血が出ているよ』

---

[23] 邦訳は英語のタイトル *The Saga of Seagull* に拠っている。

[24] *Yılanı Öldürseler* はフェティエの民謡からとられた。Aktaşı kaldırsalar/ Yılanı öldürseler/ Küçükken yâr seveni/ Cennete gönderseler. Osman Şahin. *Geniş Bir Nehrin Akışı*. İstanbul: Can Yayınları, 2004 p.58.

*Fırat Suyu Kan Akıyor Baksana* (1997)、『蟻が水を飲んだところの』*Karıncanın Su İçtiği*(2002)、『暁のおんどりたち』*Tanyeri Horozları*(2002)。現在もイスタンブルで執筆活動を続けている。

1.2.ヤシャル・ケマルの作風

ヤシャル・ケマルはトルコ文学において、農村小説作家のジャンルに入れられる。農村小説は農村社会の不均衡を世に訴える性格をもつものである。農村小説ジャンルのおこりは、1949 年から 1950 年にかけて、農村出身でその多くが農村教員養成所(Köy Enstitüsü)[25]出身の若い作家たちが出現したことに始まる。その農村小説の先駆的存在とされているのは、マフムート・マカル[26]（Mahmut Makal, 1930-）の『私たちの村』*Bizim Köy*[27](1950)である。マフムート・マカルは『私たちの村』において、村へ帰った教師の身に起こる出来事を文章にすることで、トルコにおける農村の人々の生活実態をつぶさに伝えた。アナトリアの畑を舞台に、村の取り残された状況を伝えるこの作品は、大きな反響を呼び、シンプルでドラマティックな書き方はひとつの例となった。このマフムート・マカルを受け継いで、同じく農村教員養成所出身の作家たちが生まれた。ファキル・バイクルト（Fakir Baykurt）、ターリップ・アパアイドゥン（Talip Apaydın）らである。彼らはトルコ小説に新しい風を吹き込み、1950 年代から 1960 年代にかけ、トルコ文学界を席捲する農村小説の種を成した。ヤシャル・ケマルは、農村小説が台頭していく流れのなか、その後のオルハン・ケマル(Orhan Kemal)、ケマル・ターヒル (Kemal Tahir)らと同様に農村教員養成所出身ではない農村小説作家として登場するのである。[28]

---

[25]農村教員養成所は、農村青年を受け入れて教育し、卒業後は再び農村に先生として派遣し、村人を短期間で教育する目的をもって創立された。1952 年までに 12 万人ほどの卒業生を出している。養成所の授業計画は、理論的な知識を与えるとともに、実践によって生徒の観察能力、積極性を高めるように配慮され、卒業後も農村の文化程度の低い生活に堪えられるように考えられていた。芸術の面では、世界の古典を読むとともに、特にトルコの民間伝承と民族音楽が重視されていたのが注目される。（保科眞一、pp.144-145.）

[26] ニーデ県デミルジ生まれ。農村教員養成所卒業後、教員として働く傍ら執筆活動に入る。農村や教育の現状について、多数の小話や論文を書いている。（保科眞一、pp.145-147）

[27] マフムート・マカルが記録した農村生活のメモが「実在（Varlık）」誌に掲載され、1950 年 *Bizim Köy* として出版された。*Bizim Köy* の邦訳は尾高晋也/勝田茂訳『トルコの村から－マフムート先生のルポ』1981 年、社会思想社

[28] Güzen Dino, "Türk Köy Romanı Bağlamında Yaşar Kemal." *Yaşar Kemali Okumak.* İstanbul: Adam Yayınları, 1999, pp.32-33

ヤシャル・ケマルは、農村小説作家のジャンルに入れられているが、他の農村小説作家とは異なる作風をしている。ベルナ・モラン（Berna Moran）が言っているように、マフムート・マカルに代表される（農村教員養成所出身の）農村小説作家は、農村の苦悩を写実的に描くことにおいて成功したが、小説を成り立たせるものとして農村の貧困状況というモチーフに頼りすぎてしまった。ヤシャル・ケマル同様、農村教員養成所出身ではない農村小説作家、オルハン・ケマルはというと、農村の貧困状況というモチーフに頼らなかったものの、読者が容易に信じることのできる普通の登場人物や日常生活を題材とする現実的な手法をとった。一方で、ヤシャル・ケマルの場合は、登場人物や出来事は象徴化され型となり、創造的要素が強い叙事詩的な作風となっている。[29]　つまり、ヤシャル・ケマルは、その創造的な作風により、他の農村小説作家たちとは一線を画しているのである。

序論においても述べたが、ヤシャル・ケマルがチュクロヴァの作家とされる所以は、この創造的な作風にある。ベルナ・モランはヤシャル・ケマルとアメリカ南部の作家ウィリアム・フォークナーとを比較し、「ヤシャル・ケマルは、トルコの他の作家よりも、ミシシッピーの世界を創り挙げたフォークナーに近いと言える。なぜならヤシャル・ケマルも、非凡な登場人物、普通ではない出来事、伝説、ファンタジーと現実が混合した詩、これらを多く取り上げた作風でもってチュクロヴァの世界を文学に加えたのだから」[30]と述べている。なお、Neclâ Aytür[31]もヤシャル・ケマルをフォークナーと比較している。

ヤシャル・ケマル自身も、「このチュクロヴァの土地は私の国であると同時に、私が小説に創りあげてきた国である。チュクロヴァの言葉を新ためて掘り下げ、文章や小説の言葉にし、私自身のチュクロヴァを創り上げた。新たに創造しながら、想像世界をつくろうとしてきた。チュクロヴァが私にどれだけ影響を与えようと、私が構築し、創造しようとしてきた想像のチュクロヴァの土地は、実際のチュクロヴァよりもずっと私に影響を与えている」[32]と語っている。

---

[29] Berna Moran, p.18.
[30] Berna Moran, pp.170-171.
[31] Neclâ Aytür. “Native Sons of the South: William Faulkner and Yaşar Kemal.” *Edebiyât: The Journal of Middle Eastern Literatures* 5:1-2. Middle East Center, University of Pennsylvania, 1980, pp.161-171.

[32] *Kendini Anlatıyor*, p.126.

1.3.『インジェ・メメッド』の動機―「選ばれし者」への興味

序論でも述べたように、ヤシャル・ケマルは『インジェ・メメッド』において、「選ばれし者」が書きたかったと語っている。[33]それでは、彼はなぜ「選ばれし者」に興味を抱いていたのか。その答えとなる対談がある。対談は 1988 年、ネディム・ギュルセルによってされた。[34]

ヤシャル・ケマルは、「インジェ・メメッドを書く動機になった義賊のモデルはいたのか、それはキョロールだったのか。伯父にも義賊はたくさんいるそうだけれど」という質問に次のように答えている。まず、1600 年代頃にサカルヤで名の知れていたサカルヤ・シェイヒ（Sakarya Şeyhi）という名のジェラーリーの物語に影響されたという。サカルヤ・シェイヒは 5 千人の者を集め、パーディシャーに対する反乱をおこす。偉大なオスマン軍を３度やぶる。オスマン軍がバグダット遠征に行くときに大宰相はパーディシャーに言う。「我々は出軍します、あなたがいないとき、サカルヤ・シェイヒはイスタンブルを乗っ取りますよ、彼は今までも何度我々の軍を破ったことか」　それならばと、パーディシャーは言う。「サカルヤ・シェイヒに贈り物を与え、オスマン軍に加わらせるように」しかし、サカルヤ・シェイヒは拒否する。そんなサカルヤ・シェイヒにオスマン朝側は「おいおい、狂っているのか？」「バグダット遠征に向かう軍がおまえを捕まえにやってくるぞ、拷問を加えながらおまえを 3 日かけて殺していくぞ」、そう脅す。サカルヤ・シェイヒはそれでも「行けない」「分かっている、行かなかったら殺される、だけど行けない」「おまえは狂っているのか？」「いいや、だがそう選ばれている」「私は反乱を起こすように選ばれているのだ！」　サカルヤ・シェイヒは捕らえられ、拷問を受けながら死んでいった。

次にヤシャル・ケマルが挙げているのが、母方の義賊の冒険談である。母親の伯父にチェルコという名の義賊がいた。彼には 17 人の仲間がいた。彼らはみんなしてワン刑務所に収監される。チェルコはトンネルを掘って、脱獄しようと言うが誰もついて来ない。チェルコは、ひとりトンネルを通って脱獄しては、また同じトンネルを通って刑務所に戻り、仲間に共に脱獄しようと呼びかける。しかし、誰もついて来ず、チェルコは警備員に見つかり、撃たれてしまう。チェルコは負傷するが、それでも憲兵と争い、最後には死ぬ。チェルコの心臓は、ギザギザになっていた。

さらにはカディルリには 1930 年から 36 年にかけて、500 人余りの義賊がいたこと、何

[33] *Kendini Anlatıyor* , p.161.
[34] Nedim Gürsel, pp.107-109

人かはヤシャル・ケマルの家にやってきていたことを語る。そのなかのシャーヒンの兄弟メフメットがインジェ・メメッドのモデルになったという。サカルヤ・シェイヒ、身近に聞いていた義賊たち、これらが、ヤシャル・ケマルが「選ばれし者」の物語を描く動機となった。

「では『選ばれし者』とはどういった者か」という質問に、ヤシャル・ケマルはこう答える。ナーズム・ヒクメットやチェ・ゲバラのような者。私はパリでナーズム・ヒクメットに尋ねたことがあった。「あなたはマルクス主義者でしょう、当時の条件では政党がつくられないことを知らなかった？なぜこれ程関わった？」「そうせざるを得なかった」そうヒクメットは言った。チェ・ゲバラは大臣になったか何になったか、それでも常に山に入っている。そう選ばれていたから。世界は雄牛の角の先にあるのではなく、選ばれし者にかかっているのだ。『インジェ・メメッド』の第 3 巻において、ある者が「おまえの心臓には狼がいる」とインジェ・メメッドへ言う。おまえは選ばれたのだ。私は選ばれし者の心理を描こうとした。人は反乱をおこす存在である。人の中にはこれがずっと濃くある者がいる、そういう者がインジェ・メメッドのように表舞台にでてくるのだ。

ヤシャル・ケマルにとって「選ばれし者」とは、反乱をおこすために選ばれた者であり、「選ばれし者」によって歴史はつくられてきたという認識のようだ。「選ばれし者」の物語を書く際に、義賊を主人公の「選ばれし者」と選んだのは、母親の家系に義賊の男たちが多くいたためだった。それでは、ヤシャル・ケマルが「選ばれし者」を『インジェ・メメッド』において、どう描いていったのかみていこう。次の第 2 章においては、『インジェ・メメッド』の構造に、ヤシャル・ケマルの「選ばれし者」を描くための工夫を探る。

## 第 2 章
## 構成にみるヤシャル・ケマルの工夫

この章では、ヤシャル・ケマルは「選ばれし者」インジェ・メメッドを描くため、構成にどのような工夫をしたのかをみてみる。

### 2.1.物語章

この作品は全 4 巻から成り、第 1 巻は 36 章、第 2 巻は 55 章、第 3 巻は 30 章、第 4 巻は 24 章から構成されている。各章は、メメッド（又はメメッドとその仲間の章)、アーを始めとする権力者の章に分けることができる。メメッドの章では、メメッドの視点で物語がすすみ、権力者の章では権力者の視点で物語がすすむ構成をしている。つまり、ひとつの章はひとつの物語が描かれた、物語章となっている。また、ひとつの物語章の後にその続きの物語章が続くことはなく、要するにメメッドの章の後に続けてメメッドの章がくることはなく、色々な物語章が複線的に列なっていく。

この物語章の構成は、２つのことを可能にしている。まず、ひとつの章においてひとつの物語を扱うことで、読者を混乱させることなく、登場人物に対するより深い心理表現を可能にした。これにより、「選ばれし者」インジェ・メメッドの心理を詳しく追っていくことができた。次に、ひとつの物語を続けて書かずに、様々な物語を複線的に列ねることで、読者の物語間での行き来を促し、ひとつの事象をさまざまな観点で捉えさせることを可能にした。

### 2.2.物語の終わり方

前述したように、『インジェ・メメッド』は第 1 巻から第 4 巻を通して完成する四部作である。しかし、興味深いことに、各巻の最終章はどの巻も同じ終わり方をしている。まず、メメッドの仲間であり、アーのもとで潜伏活動をしているトパル・アリが、メメッドにアーを討つなら今だという知らせを持ってやって来る。メメッドはアーを討ち、仲間に別れを告げて山に入り、姿を消す。その後、村人は祝宴を開く。こうして物語は終わる。特に、村人が祝宴を開くシーンは同じ型の上に成り立っており、巻が進むにつれ、少しずつバリエーションが加えられている。ここで、それぞれの巻末における祝宴の描写を取り上げてみたい。

第 1 巻

その後、インジェ・メメッドからの連絡はなく、彼の消息は途絶えた。

それからというもの、ディケンリデュズの村人たちは、毎年土を耕す前になると、盛大な祝宴でもって、エリンギウムの茂みに火をつける。火は三日三晩、平原を最大限の速さで進んでいく。エリンギウムの茂みは狂ったように燃える。燃えるイバラの茂みから悲鳴が上がる。この火と共に、アリダー山の山頂では丸い光が光る。山頂は、三晩青白く光り、昼間のようになる。（Ⅰ:421）

第 2 巻

その後インジェ・メメッドからの知らせはなく、彼の消息は途絶えた。

それからというもの、ディケンリデュズの村人たちは、毎年土地をすきで耕す前になると、エリンギウムの茂みにやってきては、盛大な祝宴でもって、イバラの茂みに火をつける。炎は三日三晩、風のように駆け、流れて消える。平原は炎の嵐で震え上がり、燃えるイバラの茂みから悲鳴が上がる。この火と共に、アリダー山の山頂では丸い光が光る。山頂は、三晩青白く光り、明るく輝き、昼間のようになる。（Ⅱ:430）

第 1 巻ではエリンギウムの茂みに火をつけたのが、第 2 巻ではイバラの茂みになる。燃えていたのは第 1 巻ではエリンギウムの茂みであったが、第 2 巻では平原へと広がる。

第 3 巻

その後、インジェ・メメッドからの知らせはなく、彼の消息は途絶えた。

それからというもの、チチェクリデュズの村人たちと他の村の村人たちは、エニシダ[35]の生息する山の中腹で、インジェ・メメッドが去った日に集まっては、盛大に祝宴でもって、エニシダに火をつける。炎は三日三晩、風のように中腹を駆け、山全体を、その山頂からふもとまでを、火で覆う、中腹は炎の嵐で震え上がり、エニシダからは悲鳴が上がる。この火と共に、まずユルドゥズル山で、次にチャクマクル山で、最後にボランル山の山頂でそれぞれ丸い光が光る。山頂は三晩青白く光り、明るく輝き、昼間のようになる。（Ⅲ:602－603）

第 3 巻では、「エニシダの生息する山の中腹で、インジェ・メメッドが去った日に集ま

[35]落葉低木。マメ科。『新明解国語辞典』第三版、三省堂、1987 年

って」と具体的になっている。第 2 巻では平原までしか広がっていなかった火は山全体を覆っている。丸い光が光る山頂はユルドゥズル山、次にチャクマクル山、最後にボランル山の山頂と、３つに増える。

第 4 巻

その後、インジェ・メメッドからの知らせはなく、彼の消息は途絶えた。

それからというもの、ディケンリデュズ、チチェクリデレスィ、メネクシェ、ヤヌキョレンの村人たち、それに他のトロスの村々は、土地にすきをかける前に、着飾って平原や谷、平野に向かい、エリンギウムやリンボクやエニシダやアザミを山のように積み、村一番の容姿をした若者と一番美しい娘がその山に火をつける。盛大な祝宴がとり行われる。ハライ[36]が踊られ、みたこともない昔の踊りや、新しい踊りが踊られ、喜びの歌は山々を越え、道々、鞍部(あんぶ)を通り、平野を過ぎ、国から国へと広がる。喜びの歌と共に、山から炎は平原へ、谷へ、平野へと広がる。炎は一晩かけて土地を包み、風のように流れ、四方八方を覆う、この火と共に、アリダー山やドュルドュル山やユルドュズ山、ビンボアー山の山頂で丸い光が光り、山の頂上は三晩青白く、明るく輝き、昼間のようになる。（Ⅳ:605）

第 4 巻では、祝宴をする村は一気に広がる。村人は着飾り、火をつける役目を果たすのは容姿端麗の若者と娘である。ハライが踊られ、歌とともに炎はチュクロヴァ全域を包み、４つの山の山頂で丸い光が光る。

このように、巻が進むにつれ、描写は詳しくなり、祝宴が広がりを見せていることが分かる。また、「その後、インジェ・メメッドからの知らせはなく、彼の消息は途絶えた」と、インジェ・メメッドが物語の終わりには行方知れずになっていること、村人がインジェ・メメッドを祭る祝宴で物語が終わっていることは、「選ばれし者」インジェ・メメッドを描く上で次のような効果をもたらしている。まず、行方知れずになるインジェ・メメッドは、あたかも英雄叙事詩のヒーローのようである。権力者を殺害した後に姿をくらませることにより、その存在の特殊性を強めている。次に、村人がインジェ・メメッドを祭り、祝宴を開くシーンは、物語の最後だけに限らず登場するモチーフである。このシーンを最後に

[36] Halay.ダウルやズルナの演奏で、みんな一緒になって踊られる民衆の踊りのひとつ

もう一度使うことによって、村人のインジェ・メメッドに対する崇拝心を改めて明らかにし、それが継続したものであり、拡大していったものであったことを示すことができた。

2.3.自然描写

自然描写は、『インジェ・メメッド』全巻に渡り、頻繁に使われている。まず、それぞれの巻の第 1 章は、長い巻では数ページにわたる自然描写ではじまる。物語内でも自然描写は多く使われ、そしてそのほとんどはメメッドと共にある。この理由について、参考となる見解がある。ジャン・ピエール・ドゥラージュによれば、自然の存在は、メメッドを純粋な世界へ入れ込み、伝説の英雄としての地位を確立する働きをしているという。この自然の働きとは、作家が強い感受性を持たせた全宇宙の力に英雄を加えることで、英雄が持つ人間を超えた力を示していることだという[37]。つまり、宇宙と共にある自然と英雄とを一緒に描くことで、英雄はより純粋な存在となり、普通の人とは異なる性格を与えられる。この自然とメメッドとの関係は、本書の中で確認させることは多い。メメッドが自然の中で描かれるのは、偶然ではなく、「選ばれし者」という普通の人とは異なる人間を描きたいヤシャル・ケマルの意図するところと考えられる。

以上、章の構成、物語の終わり方、自然描写の三点において「選ばれし者」インジェ・メメッドを描くための意図がみられることについて述べた。次の第 3 章では、メメッドの心理と、メメッドを崇拝し続ける村人の視線が、それぞれどう描かれているのかを考察する。

---

[37] Jean-Pierre Deleage. ”Yaşar Kemal’in sözleri:Yapıtın izini sürerken.” *Geçmişten Geleceğe Yaşar Kemal: Bilkent Üniversitesi Türk Edebiyatı Merkezi Uluslararası Yaşar Kemal Sempozyumu*. İstanbul: Adam Yayınları, 2003, pp.57-58.

## 第 3 章
## メメッドの心理と村人の視線

第 2 章では、小説の構成に「選ばれし者」を描くためのどのような工夫があったのかを考察した。一番目は、物語章として構成することで、主人公メメッドの心理をより深く追うことができるようにしたものだった。二番目は、最終章を村人がインジェ・メメッドを祭るシーンで終えることで、村人のインジェ・メメッドに対する崇拝心を改めて明らかにし、それが継続したものであり、拡大していったものであったことを示すものだった。三番目は、メメッドを自然の中で描くことで、メメッドにより大きな世界観、純粋性を持たせ、普通の人とは異なる性格を与えるというものだった。

この章では、第 2 章であげた小説の構成要素を取り上げながら、メメッドの心理と村人のインジェ・メメッドへの視線（崇拝する視線）を追ってみたい。また、主人公メメッドに関しては、メメッド又はインジェ・メメッドと 2 つの言い方がある。メメッドと表記される場合は、作者の視点、又は少年時代のメメッドを表している。インジェ・メメッドと表記される場合は、メメッドが義賊として名をはせた後の権力者・村人の視点である。

### 3.1.メメッドの心理

#### 第 1 巻―「選ばれし者」のはじまり

メメッドは農民の息子であり、彼には恋人ハッチェがいた。メメッドの暮らすデーイルメノルク村はアブディー・アーが支配する村で、村人はアーの搾取の対象にあった。そんな中、メメッドの恋人ハッチェがアブディー・アーの甥と婚約させられてしまう。これを聞いたメメッドは、ハッチェを奪い、アブディー・アーと甥を撃つ。頼るもののいないメメッドは、一度村を出たときに世話になったスレイマンの村に行く。「アブディーを殺害した、甥も」「たぶん政府に降伏しない。山に入る」（Ⅰ：116－117）メメッドはスレイマンのはからいでデリ・ドゥルドゥの徒党に入り義賊の道を歩み始める。（Ⅰ：124）これが、メメッドが義賊になった過程である。

義賊になったメメッドは遊牧民ケリムオールを巡る事件をきっかけに、仲間とともにデリ・ドゥルドゥの徒党を離れアウトローとなる。メメッドらによくしてくれたケリムオールが、財産持ちであることを知ったデリ・ドゥルドゥは、あろうことか彼からあらゆる物

を奪う。デリ・ドゥルドゥの不正に怒りを覚えたメメッドは、親しくなった徒党の仲間と共に徒党の長であるデリ・ドゥルドゥに正義を示す。

ドゥルドゥは叫んでいた：

「真っ裸にならないのなら、自分で真っ裸にならないのなら、おまえを殺してやる」

女たちは叫び声を上げていた。

ケリムオール：

「やめてくれ。やめてくれ、家族の前では」と、うなっていた。

と、ケリムオールはその目を、突っ立って、唇を噛み、ぶるぶると震えているメメッドに向けた。懇願するかのように、彼を見た。メメッドの中で何かが「ズーッ」と鳴った。火がついた。ジャッバル[38]を振り返った。見つめ合った。あの針の先の閃光がやってきて、メメッドの目に宿った。〔中略〕

「脱ぎなさい！」と叫んだ。「さもないと…」

銃身をケリムオールの口に突っ込んだ。

「脱ぎなさい！」

と、メメッドは急にチャドルから外へ飛び出した。

「動くな、デリ・ドゥルドゥ。撃つぞ」と叫んだ。「悪いが、撃つぞ。この、おまえのしたことは…」

彼の後ろから、ジャッバルの馬鹿にしたような声が届いた。

「動くな、ドゥルドゥ・アー！男を放して去れ。撃つぞ。俺たちの仲間はたくさんいる。死にたくなかったら」

メメッド：

「死にたくなかったら」

〔中略〕

「男を放して去れ。もう十分だろ。これは全くもって苦痛だ。放して行ってしまえ」

ドゥルドゥ：

「つまりこういうことか、インジェ・メメッド？つまり？」

（Ⅰ：186-187）

メメッドたちはデリ・ドゥルドゥの徒党を離れ、アウトローとなる。そんなメメッドの

[38]徒党内でのメメッドの友人。徒党を共に離れる。

耳にアブディーは負傷したが死んではいないとの情報が入る。メメッドはドゥルムシュ・アリ[39]から母親が殺されたこと、ハッチェが刑務所に入れられたこと、そしてこれら全てはアブディー・アーの仕業であることを聞く。事実を知ったメメッドは、不正義を許せない。

> メメッドの目の中に針の先のような閃光が宿った。ジャッバルはこの光に気が付いた。メメッドの目にこの光が宿ると、顔は変わり、顔の肉は緊張し、獲物に食いかかる準備ができた虎に似ていたのだ。（Ⅰ:232）

ヤシャル・ケマルは不正義に対する怒りが高まったメメッドの目を、「針の先に似た閃光」と表現する。この光は全編通じて、メメッドだけにみられる光である。「針の先に似た閃光」が宿ったとき、メメッドの不正義に対する怒りは最高潮に達し、不正義に正義でもって立ち向かうのである。

「針の先に似た閃光」をその目に宿らせたメメッドを中心に、メメッドと仲間たちはアブディー・アーの家を襲う。このときの出火が村に飛び火し、アクトズル村を焼き払う結果となる。メメッドは、アブディー・アーは死んだものと信じ、土地は村人たちのものと宣言する。

> 「あいつは死んだ」「ある考えがある」「この村の、他の、４つの村の土地もみんな。誰がどれだけ…。どれだけ種をまこうが。みんな…。種をまいた分だけ…。もうあとはみんなが思う通り。分かるでしょう。僕は銃を持って見守る」「この土地はみんなのものだ…土地はあの残酷なやつがつくったわけじゃない。（アーは）５つの村を奴隷のように働かせた。チュクロヴァにアーはいない、何もない。君もハサン・オンバシュ[40]から話を聞いていたら！…」（Ⅰ：310）

メメッドはかつて、町で知り合ったハサン・オンバシュから、町にはアーはいないとい

---

[39]デーイルメノルク村の村人。ヒュル・アナの夫。メメッドの母親ドネとは仲が良かった。
[40] メメッドは町に行ったときに彼と知り合い、彼に町にはアーがいないことを聞く。*İnce Memed 1*, pp.77-78.

う話を聞く。町では「みんなの土地はみんなのもの」であることに感動を覚えた。メメッドによる、土地を村人たちに返そうという宣言は、ハサン・オンバシュのこの言葉に影響されたものである。メメッドは少年時代に話に聞いた夢の世界の実現を強く願っている。

「選ばれし者」へと描き上げられてきたメメッドであるが、ヤシャル・ケマルは「選ばれし者」の心がまだ成長過程にあることを、恋物語を通して描く。メメッドは、村とハッチェを天秤にかけたとき、ハッチェを選ぶのである。

刑務所に収監されたハッチェのもとへ行くというメメッドに、皆が反対する。

> 「捕まったらどうする？俺の希望も、村全体の希望もおまえにあるのに」とトパル・アリ[41]は言う。メメッドは理解できない。「ひとつの村の希望？ひとつの村の…どこの村？」と言い返す。しかし、メメッドは母親の死、ハッチェが刑務所に入れられたことを聞いた今、ハッチェ以外のことは考えられない。「ほら、ここに、ちょうど心臓の真ん中に火がある。踊っているみたいだ、心臓が。行かなければ。もう耐えられない」（Ⅰ:347 頁）

メメッドは、アリからハッチェがコザン刑務所へ連れて行かれることを聞くと表情を一変させる。何かを決心したメメッドとなる。

> （メメッドは）このことを聞くと、ふいに雷が落ちたかのようにまわった。少ししたら、正気に戻った。アリのことを忘れてしまっていた。ひとり笑った。チュクロヴァ全体が木、草、土地、土地、町、みんな黄色の薄暗い光となった。彼は笑い続けた。そして急に馬にまたがった。一瞬にして変わり、まったく別人のインジェ・メメッドとなった。（Ⅰ:361 頁）

メメッドにハッチェ奪還のチャンスがやってくる。メメッドは憲兵によって連れて行かれるハッチェを、道中奪還する作戦を立てる。

---

41 追跡人。アブディー・アーにメメッドの足跡を追跡するよう雇われたが、メメッドに鞍替えしアーのもとで潜伏し、メメッドに情報を伝えるようになる。

メメッドは嬉しさいっぱいの様子で門から入ってきた。ジャッバルはメメッドと知り合って以来、こんなメメッドは初めて見た。セフィル・アリもこんなメメッドを見たことがなかった。嬉しくて羽をつけたメメッドをみることは彼らにとって嬉しいことだった。メメッドは小屋の中で歩き回りながら陽気な歌を歌っていた（Ⅰ：362）

セフィル・アリ[42]はサズを弾きはじめ、メメッドもそれに合わせる。ハライも始まった。場が盛り上がってきたところでメメッドの表情が一転する。

メメッド：「今日が決行の日だ」

トパル・アリは門のところで腰を壁にもたれかけて微笑みながら立っていた。

ジャッバル：「トパル・アリ、どうなってる！」と言った。

トパル：「（憲兵は）水曜日に町からコザン刑務所にハッチェを連れて行く。（メメッドは）道中、憲兵からハッチェを奪還する気だ。だから喜んでいる」

（Ⅰ：363）

メメッドはこの頃、キョロールに影響を受ける。キョロールの話に勇気付けられ、母親とハッチェの復讐をするため、アブディー・アーを殺害することも心に決める。

知り合ったばかりの頃、セフィル・アリはキョロールの物語を語った。キョロールの登場。何日間も、メメッドの頭の中であのキョロールがまわっていた。

道でキョロールは小さな犬をみたらしい。犬は小さく、手ほどの大きさ。４，５匹の大きな大きな犬がその小さな犬を連れてきたらしい。取り囲んだらしい。小さな犬は逃げもせず、自身を守った。自身を守ったように、大きな犬もやっつけて…。一匹一匹追いやり、去っていく。キョロールはこの事を見る。この争いを観察する。

つまり、キョロールが言うことには、小さな一匹の犬でも…勇気を出せば…。その後、キョロールはキョロールとなる。おそれない。父の目に同じことがふりかかれば山に入る。

---

[42] 義賊。アーシュックでもある。

キョロールのことを聞いて以来、メメッドは彼に影響されていた。キョロールのことを聞いた後、もう一度確信した、アーを殺害することを。（Ⅰ:363-364）

義賊たちに恩赦が出た。恩赦が出ると山にいた義賊たちの多くは山を下り降伏した。メメッドにはジャッバルが恩赦を知らせにやってきた。ハッチェの死のショックから立ち直れないメメッドも、ふらふらと山を下りる。

２人の古い友人同士は長い間抱擁を交わし、話もしないで隣同士座っていた。
ジャッバルは別れ際に：
「僕は行って降伏するよ」と言った。
メメッドは口を開かなかった。
デーイルメノルクには昼ごろ着いた。表情は暗く、目はくぼんで、額にはしわが寄っていた。岩の断片のようだった。小さくなった目は確信をもった光であった。こんなふうに真っ昼間に村にやってきたのは初めてだった。酔っ払いのようによろめいていた。我を失っていた。
〔中略〕
インジェ・メメッドが村にやってきたことを村人たちはヒュル[43]に知らせた。ヒュルは走りながらやってきて広場で彼を向かえた。
怒って襟首をつかんだ：
「メメッド！メメッド！」と可能な限りの声で叫んだ。「ハッチェが彼らの犠牲となったのに、今さら降伏するつもりなのかい？アブディー・アーがまた村にやって来て、パシャみたいに居座るだろうよ。おまえは降伏するつもりかい？…」

ヒュル・アナの叱責が、ハッチェを失くした悲しみに明け暮れるメメッドを奮い立たせる。メメッドはアブディー・アーに対する憎しみを思い出し、目にあの閃光を宿す。

メメッドはゆっくりと顔を上げた。目はまたあの閃光となっていた。頭からは黄色い輝きが発し、光は流れた。（Ⅰ:420 頁）

[43] ヒュル・アナ。メメッドの母の死後、彼の母親代わり。

メメッドは、アブディー・アーを殺害し、山へと消える。

ここまでの部分では、目に宿る閃光を何度も登場させ、メメッドが心に狼をもつ、「選ばれし者」であることを作者は描いた。アブディー・アーを殺害したことで、メメッドが「選ばれし者」であることは露呈されるが、メメッドは認識していない。作者は「選ばれし者」を待つ次の段階として、「選ばれし者」が苦悩する段階を描く。最初の苦悩は、アブディー・アーを殺害した後の自分を整理できない苦悩、次の苦悩はアブディーがいなくなっても代わりのハムザがやってきたことを知り、自分の行為は何の解決にもなっていないことの苦悩である。

第 2 巻―「選ばれし者」の難局（もつれ）

第 2 巻において、メメッドの心理はからまった状態で登場する。第 1 巻の最終章において、村に戻ってきたメメッドに、村人は冷たい視線を投げかけ、ヒュル・アナは、おまえが戻ってきたらアブディー・アーがまた大手を振るうではないかと、一喝した。メメッドは、村が自分を受け入れなかったことに孤独を感じている。さらには、アブディー・アーを殺害したことで、自分は狙われ殺されると、恐怖を感じている。孤独と恐怖がまじりあったメメッドの心理は、ひとり山を徘徊する場面にあらわれる。

> メメッドは困惑していた。暗い小屋の中で全てのことを考え続けていた。〔中略〕時々、死ぬのではないかとこわがり、死や空虚さを近くに感じ震え、頭の先からつま先まで死の恐怖で震えていた。自身はもうとっくに死は避けられない運命にあると覚悟していたものの、死がいったいどうやってくるのか推定できずに、恐ろしいほど気になっていた。（Ⅱ:100）

> メメッドは時々、怒りで震え上がり、「争いながら死んでゆくんだ」と叫んでいた。メメッドの心の中に、ある復讐心があった。この復讐心を、アブディー・アーを殺害した時点で消化し切れていなかった。この復讐心をどうしたらよいのか分からずにいた。警察署のチャウシュに怒りの矛先をむけた、ヨバズオールを叩きのめしたチャウシュに…。政府に、アリ・サファに、アリフ・サイム・ベイ…。仇たち

がメメッドの脳裏に現れては消えていった。（Ⅱ:100）

メメッドの、孤独感は過去を思い起こさせ、死への恐怖は望郷の想いへと変わる。

ハッチェ、母親、アブディー・アー、山々、墓地、カライジュ、全てが頭の中で、プクプクと、光、ほとんど目に見えず、暗闇、お互いに混ざり、痛み、心地よさ、魅力的な、石のように硬い夢の世界…頭の中で回っては止まっていた。喜んだかと思えば、次の瞬間には深い悲しみに包まれていた。門のところにアカシアの木が濃く温かい香りを放っていた。何千もの蜂がアカシアの花の上や周りを徘徊していた。メメッドは重く温かい、この濃い香りに酔っていた。（Ⅱ:101）

メメッドの目で見る自然描写は続く。誰も自分を受け入れてくれないことへの孤独感、死への恐怖、自分が存在していた普通の世界に感じる安堵感、全てはメメッドの中で、整理できない形で放置されている。そんなメメッドの複雑な心境を、ヤシャル・ケマルは自然を効果的に使いながら描く。

大きなスズカケの木が目の前に現れた。強い風が吹いて、葉は揺れていた。音をたてていた。紫色をした岩の真ん中で真っ赤なエゾノチチコグサは枯れていた。これは、あたたかみ、丸み。両腕でも抱えられないくらいの。炎のように、はっきりとした赤が岩の真ん中にはあった。離れたところからでも見ることができた。はっきりとした赤色が目の前にやってきて、燃えて、消えた。村は、一番小さな石や水、屋根、小さな子供達、蜂、山、岩、人々、そして鳥とともに目の前にあった。恋しかった。心の中に堪え切れないほどの想いを感じた。いずれにせよ近いうちに殺されてしまうのだ、そう考えた。村を死ぬ前にもう一度見ておこう。（Ⅱ:101）

メメッドはサル・ウムメッドを訪ね、自分は皆に敵視されていることを知る。長居するのは懸命ではないとの忠告を受け、サル・ウムメッドに別れを告げ、隠れることのできる場所を探し始める。どこか隠れる場所はないかと思考をこらす一方、自身の村に行くという考えも捨てきれない。

メメッドは山の中腹をのぼりきると、森の中へ入って行き、知っている秘密の近道を抜けた。ひどく早足で歩いていて、心の中では恐怖が大きくなっていった。心は混乱していた。四方は真っ暗で、ひとっこひとりおらず、仲間もいなく、一人ぼっちだった。世界には兵士、村人…。山、石、兵士、村人、木、草、飛んでいる鳥、地面の蟻、みんな、すべての生き物はメメッドの敵だった。

恐ろしいほどの絶望が世界を闇にしていた。

ますますメメッドの心の中で村への望郷の想いは高まっていった。村に行けば何が自身の身に起こるかは分かっていた。生きて帰ることのできる望みはなかった。けれど、ひどく、そう狂ったように村が気になっていた。（Ⅱ:134）

アリ・サファ・ベイ、アリフ・サイム・ベイ、チュクロヴァのアー達…。メメッドは長い間、なぜチュクロヴァのアー達までもが自分を敵視しているのかが分からずにいた。アブディー・アーを殺した。けれどアブディー・アーは、チュクロヴァのアー達の親戚ではないではないか…。メメッドはアー達に何をしたわけでもないのに、アー達はメメッドを捕まえるため、トロスの山々を憲兵で埋めてしまったのはなぜ？正直、まだこの理由が分からずにいた。

〔中略〕

どこに行けば、そう考えた。ユーフラテス川の流れに沿って、言葉もわからず、狼がうようよする地をやってきたが、隠れることのできる場所を見つけられなかった。 世界を狭く感じた。再び、この巨大なトロスに戻った。人は誰しも知る由もない、いつ自分が死ぬのかは。しかし僕はトロスに死ぬためにやって来た。父なる土地に。死は鼻の先でぷんぷん匂っている。義賊の男を、インジェ・メメッドとなった者を、アーやベイたちがいびきをかいているこの世界は受け入れない。サル・ウムメット・アーよ。土地も空も受け入れない。どこに行こうか、サル・ウムメット・アー？僕は翼が折れた鳥なのだから、たとえどんなに小さな存在であろうとも、どの枝として僕を受け入れてはくれない。メメッドは逃げる場所を考えているが、見つけられず、泡を吹いていた。（Ⅱ:134）

メメッドは、どこへ行けばよいのか見つけられずにいる。自身の村まですぐのところまで来てはいるが、村に行くことは決心できないでいる。何もかも敵となってしまった状況

で、メメッドは考えている。自身が慣れ親しんだ土地からも、見ていた空からも、避けられているように感じている。メメッドの感じている世界はここでは広大だ。サル・ウムメッドに別れを告げた直後、石、木、草などすぐ目の前にある自然を見て、この自然からも受け入れられない自分を感じていた。しかし、ここでメメッドはより大きな世界の中で自分を捉えている。天と地と自分。その世界に翼が折れた鳥がやってくる。しかし、翼が折れた鳥を受け入れる枝さえも存在はしない。メメッドは自身を翼が折れた鳥と感じている。受け入れてくれる枝もなく、折れた翼のまま真っ暗な世界を飛んでいる。第1巻ではキョロールの子犬の話に共感し、小さい存在でも勇気を出せば、かなわないものはないと力を出した。今度は、メメッドは小鳥になったが、その鳥は自身を見失いつつある。

故郷の村に3年ぶりに戻ったメメッドは、ヒュル・アナから自分がいない間に起こったことを聞く。アブディーが死んで、平和な生活がやってくるはずだったが、その弟であるケル・ハムザがやってきて村を支配していた。彼は、アブディーよりも千倍ひどい人間だった。ヒュル・アナの夫、ドゥルスンは亡くなっていた。メメッドは、これらのことを聞き、ショックを受ける。

> メメッドは揺れながら死者のように立ち上がった。立っている事が出来なくて、柱にもたれかかった。よろめきながら、外に出て行った。酔っ払いのようにディケンリデュズに向かって歩いた。歯をガチガチ震わせていた。
>
> 朝一番の光の中、メメッドはディケンリデュズの真ん中で、直立不動で固まって、全く動かないでいた。顔は真っ青に固まっていた。影はとても長かった。
>
> 昼になってもメメッドは動かなかった、影は短くなってメメッドの足元で黒く丸まっていた。（146頁　Ⅱ）

メメッドは村の悲惨な状況を聞き、怒るのではなく、自分がやってきたことの意味を喪失する。自分が表舞台に出て、アーを殺害したりしなければ、全ては上手くいっていたかもしれない、そう考える。

> メメッドの心に苦しみに似た何かが落ちた。「問題が見えた」と言った。後で:「前

より良い」と言った。「何をしてもこうだったんだ。ハッチェも殺した、母親も…。山に行った。村人を、こんなふうに惨めにした。（村人は）不正の下で嘆いている。僕が出てくる前は、みんなそれぞれ自分自身の生活をしていた。僕はいなくなろう。去ろう」

全ては町に行き、ハサン・オンバシュとハンの部屋で話した後に起こった。「足を折って町に行かなかったら。目が見えなくてハサン・オンバシュを見ることができなかったら。耳が聴こえなくて、彼の言葉を聞くことができなかったら。村の混乱を見よ！ほら、この状況を、この日を、この平和を見よ！」（Ⅱ:181）

メメッドは、事の発端は、町に行ってハサン・オンバシュと会い、アーのいない世界を知り、その世界を夢見たからだ、と考える。

メメッドの自分がやってきたことは無意味だったという喪失感は、メメッドが言う「アブディーは去り、ハムザがやってきた」という言葉に集約される。「選ばれし者」が自信を失っていく様子がこれ以後描かれる。

「僕の身に起こったことを、みなさん知っているでしょう」と始めた。〔中略〕「…僕は、最終的にアブディーを殺害した、貧しい、かわいそうな者たちを救おうと。彼らは救われたが…。アブディーを殺害した後、みんな幸せになった、幸せになってもらいたかった。土地を分け合った。村人たちも僕も、みんな、こうやって幸せになるのだと思った…。だが、その後何が起こった？その後、ケル・ハムザがやって来た、アブディーより千倍悪い。彼の手は血まみれ。わたしたちに血を流させた。ああ、この結末はどうなる？アブディーは去り、ハムザがやって来た。ハムザ１人はアブディーの千人分ぐらい…。ああ、僕がしたことは何だったのか、どこにいってしまったのか？…」（Ⅱ:219）

メメッドと仲間たちは憲兵に包囲される。メメッドは、自分たちを狙って撃ってくる者の中に、かつての義賊カラ・イブラヒムを発見する。メメッドは彼を撃ち、彼が倒れるのを見ると覇気を失う。カラ・イブラヒムの死は、メメッドに喪失感をもたらし、メメッドは「アブディーは去り、ハムザがやってきた」と繰り返す。

少したったら、自分もそこの、蜘蛛の巣に覆われた、その薄暗い水車小屋でカラ・イブラヒムのように倒れ、すべてが終わるはずだった。急に脳裏に「アブディーは去り、ハムザがやってきた、アブディーは去り、ハムザがやってきた」がよぎった。心の中でこの言葉を言いはじめた。これが何か本当に知りたかった。何だったのかこれは、どういうことだったのか？いつもこうなるはずだったのか？全ては無意味だったのか？解決の道はなかったのか？一時、彼（メメッド）の手が動かなくなり、弾が撃てなくなった。そんなふうに止まってしまった。ぼーっとしてしまった。何ということか、彼が止まると、外の者たちもデーイルメン村に向かって撃つのをやめた。カラ・イブラヒムの死体に目をやった。死体には影が落ちていた。頭には影がかかっていた、横向きに投げ飛ばされていた。ゆらゆらした髭は前よりもゆらゆらしていた。メメッドには彼の口元にあざ笑うかのような笑いがあるように見えた。メメッドは汗びっしょりとなっていた、汗はだんだんと冷たくなっていた。少しあとで、彼の体を冷たい水のような何かが覆い、彼を冷やし始めた。体はゆっくりと震えだした。クラックスズ・イスマイル[44]に目をやった。その場から、ぴくりともしないで、暗い隅で、不吉な人のように、目はきょろきょろし、光っていた。クラックスズ・イスマイルは笑った。急にこの水車小屋で包囲されていること、おそらく少し後で殺されることがメメッドの脳裏によぎった、凍える体は稲妻のような恐怖を感じた。メメッドは死にたくなかった。「アブディーは去り、ハムザがやってきた」、そう呟いていた、窓に近づくとき、外でおそろしい音がした。馬のいななきは弾の音に、弾の音は空の轟音にかき消された。水車小屋に湧き出る水の音は大きくなった。メメッドは外で、岩の下に隠れようとしている影を撃った。この影も、耳を聞こえなくさせるような奇声を発し、ボールのように舞い上がった。いっそう暗くなっていた。空はゴロゴロと音を鳴らし、稲妻が光った。辺りは随分と暗くなっていた。（Ⅱ:262 頁）

メメッドは逃げ、ワイワイ村のセイファリの家へやってくる。メメッドは怪我をしており、心身ともに衰弱し切っている。セイファリはメメッドを農園のキョシェ・ハリルのも

44 デーイルメノルク村の村人。

とへ連れて行き、そこでメメッドをかくまってもらう。キョシェ・ハリルの家で、怪我を負ったメメッドをカメル・アナ[45]、セイラン[46]、フェルハット・ホジャ[47]、コジャ・オスマン[48]は介護する。キョシェ・ハリルの農園で療養中のメメッドに、フェルハット・ホジャとヨバゾール[49]がゼイネルを殺害したとの嘘の罪にきせられて刑務所に収監されたという知らせが届く。このことを聞き、メメッドは一変する。

> 辺りは深い静寂に包まれていた。深いおそろしさを伴った…。蝿の羽音がしていた。暑かった。全てが目を眩ませるような光の中で輝き、明らかにされ、流れていた。
>
> メメッドの頭の中では黄色い光が輝いていた。光はまばたき、散らばり、すごい速さでもって目を盲目にさせる黄色い光を引き出し、回っていた。（Ⅱ:366-367）

自分がしてきたことが何も意味を成さなかったという喪失感は、メメッドを苦しめる。愛するハッチェや母の死は、自分のせいなのだという苦しみが、「僕の手や腕を縛る」と言う。

> （メメッドは）「ハッチェの血、母の死、僕が山に入ったことはこの役に立った」、「アブディーが去り、ハムザがやって来た」と言った。
>
> 〔中略〕
>
> 「僕の手や腕を縛り、僕を殺すのはこれだ。努力が何の役にも立たないこと、役に立たないばかりではない、問題がより悪化すること、悪くなった上にまた悪くなること、これが僕を押しつぶし、睡眠を妨げる。僕は事を良くしようとして、あらゆる不幸を連れてきた。それも大きな村の目を。僕のせいで村人たちは不正に遭い、飢えでふくれながら死んだ、僕のせいで…。僕のせいで薔薇のような娘たちは強姦

---

45 コジャ・オスマンの妻。
46 メメッドが義賊となって家を去った後、彼の家に住みはじめた。両親を亡くしているので、カメル・アナは母親代わり。メメッドと結婚し、子供を産む。
47 ワイワイ村の村人。コジャ・オスマンとは友人。
48 ワイワイ村の村人。フェルハット･ホジャとは友人。
49 ワイワイ村の村人。

された。これだ、僕の手や腕を縛るものは」といい終えた。（Ⅱ:412）

アリ・サファ・ベイはワイワイ村へと流れる水源を止める。村は枯渇し、村人たちは転住しはじめる。この事を知ったメメッドは不正者を倒すことを決める。メメッドの目には光が宿る。自分がしてきたことに確信がもてなくなっていたメメッドであったが、不正には目をつぶって傍観することはできないのである。再びメメッドの目に光を宿らせることで、「選ばれし者」は心の状態に関係なく、その運命に生きてしまうことをヤシャル・ケマルは描く。

アリは、このように悲しみに暮れ、岩のように硬いメメッドの顔を見たことがなかった。メメッドの目に、このように光る、鋼に似た閃光も見たことがなかった。（Ⅱ:422）

メメッドはアリ・サファ・ベイを殺害する。続いてアブディー・アーの死後、デーイルメノルク村を搾取し続けるハムザをも殺害する。第 1 巻の終わりと同様、山に入り消息を絶つ。

第 1 巻で、アブディー・アーを殺す前のメメッドの目には「針の先に似た閃光」が宿っていたのに対し、アリ・サファ・ベイ、ケル・ハムザを殺す前の目には「鋼に似た閃光」がある。第 1 巻では「針の先に似た閃光」と表現されていたものが、「鋼に似た閃光」へと変化している。第 2 巻におけるメメッドの心理の変化が、ここにあらわれている。

第 3 巻―「選ばれし者」の転換

メメッドの、「アブディーは去り、ハムザがやってきた」からくる苦しみは続く。自分がやってきたことに確信が持てなくなったメメッドは、義賊をやめる決心をする。メメッドは、この思いを遊牧部族の長バッタル・アー[50]に打ち明ける。

（バッタル・アー）「おまえのことを少しでも知っているから言っておくが、お

[50] 怪我をして倒れているメメッドを助けかくまった。

まえの心にこの狼がある限り、こんな風にまた繰り返している限り、おまえは選ばれしものだ。キョロールも選ばれしものだった」

（メメッド）「分かっている、逃れられない、分かっている、止まりはしない、分かっている、インジェ・メメッドがなくなると耐えられない。分かっている、自分のことは、分かっている、何の儲けにもならない…分かっている、分かっている、分かっている」

「僕の苦しみは大きい。アッラーよ、これほどの苦しみを誰にも与えないでおくれ。敵の身にも与えないでおくれ…。僕はアブディー・アーを殺害した、彼に代わってケル・ハムザがやって来た。彼も殺害した、さて次は…。アリ・サファ・ベイを殺害した。もう既に彼の代わりに誰かやって来ているはずだ〔中略〕僕が彼ら全員を殺してどうなった、答えておくれ、バッタル・アー？千人殺害したって、二千人やって来るだろう…」

バッタル・アーがケラケラと笑うと、メメッドは妙な気持ちになった。

「さて、おまえの苦しみは分かったが」とバッタル・アーは言った。「インジェ・メメッドが殺される、代わりにアリ・メメッドがやってくるだろう、彼も殺されると、代わりにハサン・メメッドがやってくる…。彼も殺されるとヴェリ・メメッドがやって来る…。彼も、彼も、彼も…。おまえはどう思ってるんだい、メメッド、インジェ・メメッドたちに終わりがあるとでも？人の心の中には選ばれし者の狼、インジェ・メメッドやキョロールの狼がある。キョロールが去り、インジェ・メメッドがやってきた。人の心にこの狼がある限り、人に何が起ころうと負けることはない。おまえは人の心にある狼だ、したいようにしなさい、どこへでも行きなさい。人の心の中にあるこの狼がなくなるとは、人間性が人間性ではなくなるということ。人は、心にあるこの狼を失くすことなく、永遠にその目となり、その心臓となり見守る。その狼は人の頚動脈、鼓動する心臓だ。おまえの中にある狼も、人間性のこの狼だ」（Ⅲ:379-380）

このバッタル・アーの言葉は、ヤシャル・ケマル自身の「選ばれし者」観ととれる。バッタル・アーは、インジェ・メメッドは尽きることはないと説き、メメッドはこの言葉に安心する。しかし、これはヤシャル・ケマルの忠告でもある。「選ばれし者」は確かに他にもいるが、メメッドにある内なる狼は決しておまえを放しはしないという。義賊をやめる

メメッドの心の安堵はしばらく続く。

メメッドは義賊をやめ、ひとり徘徊する。バッタル・アーの「一人のメメッドが行ったとしても、千人のメメッドがやってくる」という言葉に安堵感を見出していた。

> （メメッドは）どこへ行くのか、何をするのか分からなかった。どこかに行けば、この権力者ムスタファ・ケマル・パシャは彼を見つけないとでも？見つけて吊るし上げないとでも？さらにバッタル・アーが言ったことが忘れられなかった。あの言葉が強く影響していたので、とにかく戻って、真夜中にバッタル・アーを起こし、「一人のメメッドが行ったとしても、千人のメメッドがやってくる」と言い、銃を手に歩き出すところだった。この言葉は彼を生き返らせ、全く別人にしてしまっていた。この言葉にフェルハット・ホジャは何と言っただろうか、そう考えた。フェルハット・ホジャもバッタル・アーのように考えただろうか？ヒュル・アナのもとに行き、フェルハット・ハジャへ別れの挨拶を伝えてもらうはずだった。彼が義賊をやめて、山を下りることにヒュル・アナはどんな反応を示しただろうか？〔中略〕
> 急にはっとした、背中に冷たい汗が流れた、辺りを見渡した、信じられないくらいの空虚の内にいることを感じた。辺りで何か探されているようだったが、見つけられなかった。後で、急にパッとひらめいたが、銃を持ち合わせていなかった。恐くなった。ああ、今もし、義賊や憲兵とはちあわせになったら、どうなるのだろう…。見通しが良いところに座って、馬鹿みたいにザクロを頬張っていた。立ち上がるとすぐ、森の中に入った。もうこれからは、夜中に移動し、昼間は穴に隠れて、いつか真夜中にヒュル・アナ、そう、あの薔薇のようなアナの門をたたくはずだった。（Ⅲ:382）

義賊をやめることで「選ばれし者」の重荷から開放されるはずだったメメッドであったが、ひとりになった途端、「信じられないくらいの空虚の内にいる」ことを感じる。この空虚感は重荷によって生かされる「選ばれし者」が、その重荷を放棄したため生まれたものであろう。

メメッドはヒュル・アナに義賊をやめることを打ち明ける。

「アナ、僕はこれから義賊をやめる」

ヒュル・アナはこの言葉を聞くと襟首をつかまえ、「どこへ、どこへ勇敢なメメッド、どこへ？」と言うだろうと想像していた。メメッドはこの言葉に耐えられただろうか？アブディー・アーを殺害する前、耐えられただろうか？

「アナ、これから先は足を洗う、名も知れない者となって、子供をもつよ。インジェ・メメッドは死ぬ、名前も変える」

ヒュル・アナは愛想よく、落ち着いて、何の反応も見せることなく、向かいに座り、メメッドの言うことを聞いていた。

「アナ、アブディー・アーが死んだ代わりにケル・ハムザがやってきた。ケル・ハムザが死んだ代わりに…アリ・サファ・ベイが死んだ、まだ多くのアーがいる」

ヒュル・アナは、メメッドが言うことを黙って聞いていた。

「インジェ・メメッドが死ぬと、アナ、たくさんのインジェ・メメッドがやって来る。アーたちは少数、インジェ・メメッドたちはたくさん。インジェ・メメッドがひとり死んだとしても、千、二千、一万、十万のインジェ・メメッドがやって来る。僕がいなくてもそうなる」〔中略〕

「遠くの村に行って畑を手に入れる、少しばかりならお金はある、家を買う、名前もカラ・イブラヒム、セーフィル・イブラヒムにする、良いと思うかい、子供たちもできる。分かったのは、義賊は僕には合わない、僕も父親のようにいくじなしで、しおれた、弱い人間だ。人を殺害することは僕の仕事じゃない。よく考えた、アッラーが創ったものはただアッラーのみが壊すべきだ」（Ⅲ:389-390）

メメッドは、またバッタル・アーの言葉を考え、幸せを感じている。

アーがひとり去り、千人のアーがやってきたとしても、インジェ・メメッドがひとり去れば、一万、十万、一千万のメメッドがやって来るはずだった。アーたちは少なく、貧しい者はたくさんいた。あの日以来、インジェ・メメッドは、この言葉を安らぎとして繰り返していた。彼がこの言葉を繰り返せば繰り返すほど、心は明るくなり、愛や友情でいっぱいになる、山々、雲、そこの流れる荒々しい風、音をたてる稲妻、雷、これらを愛しく見ていた。（Ⅲ:434）

バッタル・アーの「アーがひとり去り、千人のアーがやってきたとしても、インジェ・メメッドがひとり去れば、一万、十万、一千万のメメッドがやって来る」という言葉が、義賊をやめるメメッドの心の支えになっている。自分がいなくなっても、インジェ・メメッドはまた新たに生まれるという希望がメメッドを楽にしている。自然に対するまなざしは柔らかく、「山々、雲、そこの流れる荒々しい風、音をたてる稲妻、雷」を愛しく見ている。

メメッドはフェルハット・ホジャのもとにやってきて、義賊をやめたことを話す。

> 「セイランと一緒に海岸へ行きなさい、みかんの花のところへ…。だけど、知っておいて欲しいのは、おまえは長い間そこにとどまらないだろうということ、山へまた帰ってくるだろうということ。おまえの精髄には山々がある。〔中略〕いったんインジェ・メメッドとなったら、インジェ・メメッドであることは人にとって最も重い荷だ。いったんインジェ・メメッドとなったら、他のものにはなることはできない」
>
> 「アブディー・アーを殺害したとき、おまえは消えてどこかへ行ってしまった、なのに、なぜ戻ったんだい、誰がそうすることを強制したんだい、一体誰がおまえを知っていたというんだい？」
>
> 「僕は戻ってきた」とメメッドは言った。
>
> 「おまえはまた戻ってくるだろう。おまえの精髄にあるものは、彼らの精髄から繋がっているものだ。キョロールやピル・スルタン・アブダル、サカルヤ・シェイヒたちの精髄からな」
>
> （Ⅲ:524）

キョロールやピル・スルタン・アブダル、サカルヤ・シェイヒを例に出したフェルハット・ホジャの言葉は、ヤシャル・ケマル自身の言葉と捉えることができる。義賊をやめるというメメッドに、インジェ・メメッドであり続けることは相当な重荷であるが、一度インジェ・メメッドとなったものは、自身の意志に関わらずその運命から逃れることはできないと説く。現に、アブディー・アーを殺害した後、おまえは再びこの世界に戻ってきた

だろうと言う。フェルハット・ホジャは初めてメメッドに、「選ばれし者」とはどういう運命にあるのかを示した。

メメッドらは義賊の徒党と憲兵に取り囲まれる。メメッドらは二手に分かれ、メメッド、フェルハット・ホジャ、トパル・アリ、カスム、ムスルム[51]はチチェクリデレ村へと向かいサル・チャウシュの家に隠れる。（第 27 章）メメッドらを捕らえたマフムート・アーは自身の家へ連れて行く。村の女たちがメメッドらを助ける。チチェクリデレ村の村人たちがメメッドを擁護したのに怒ったマフムート･アーは村人たちを村から追い出しはじめる。メメッドはマフムート・アーに怒りを感じる。「鋼の閃光」が登場する。

> カスムばかりが話し、メメッドは黙っていた。深く考え込み、埋葬されたように心ここにあらずであった。ときどき、あの鋼の閃光が目に差し、立ち上がり辺りに耳をかたむけ、頭には黄色い光の玉が散らばりながら輝き、地面に斑点をつくっていた。（Ⅲ:597）

トパル・アリのところへ行っていたムスルムが戻ってきて、マフムート・アーを討つなら今だと伝える。

> 「死んでも私をここに、チュクロヴァの土地に放っておかないように。私の死体はヒュル・アナのもとへ、彼女は何をすればいいか、私をどこへ埋めればよいか知っている。そしてヒュル・アナに伝えて欲しい…」言葉を詰まらせた。「さあ、行こう」（Ⅲ:600）

メメッドは、マフムート・アーを討つと、第 1 巻、第 2 巻と同様、山に入り、消息を断つ。

第 4 巻―「選ばれし者」の終局

第 4 巻では、メメッドは地中海の町で、セイランやヒュル・アナと一緒に、夢にまでみた普通の生活を始める。しかし、メメッドの前に度々、男の幻覚が現れるようになる。メ

[51] 羊飼いの少年。メメッドに憧れている。

メッドはこの男の幻覚に悩まされるようになり、自分を失っていく。孤独を感じ、彷徨いつづける。町には馴染めなかったメメッドであったが、唯一教師ゼキ・ネジャドとは交流をもっていた。彼が権力者シャキル・ベイに殺害されたこと、村人たちが大変な不正にあっていることを聞いたメメッドは、我を取り戻す。自分はインジェ・メメッドであってこそ生かされていることに気付く瞬間である。メメッドはシャキル・ベイを討ち、再び義賊となる。そうして、インジェ・メメッドを捕まえようと村々を荒らし、村人を村から追い出しているアリフ・サイム・ベイを殺害する。

メメッドはマフムート・アーを殺害した後、独りアナヴァルザの岩場に隠れている。ムスルムとアクチャサズにあるポプラの木のもとで落ち合うことになっていた。ムスルムは彼をフェルハット・ホジャの友人であるアブドュルセラーム・ホジャの村へ連れて行くはずだった。メメッドは昔、ドゥルスンからきいた理想の村を目指し、村を飛び出したことがあった。（第 1 巻、第 2 章）ここでメメッドは、もしかしたらアブドュルセラーム・ホジャの村はドゥルスンからきいた理想の村かもしれないと思いを巡らす。

> メメッドは、あの村を思い出すとひとり微笑み、気持ちが軽くなった、子供時代を思い出した。あの村へ行くはずだった。あの時は他のことは何も考えていなかった、こうなるはずだった、あの村へ行き、あの男の下で羊飼いとなり、海を見て、みかん畑を見て回り、みかんの花の匂いはメメッドをうっとりさせるはずだった。ドゥルスンはどこへ行ったのだろう？もしかすると村にいるのかもしれない、あの村に行ったのかもしれない。アブドュルセラーム・ホジャの村がドゥルスンの村かもしれないよ？（Ⅳ:17）

ヤシャル・ケマルは再び、理想郷を夢見るメメッドを描く。ここでメメッドの理想郷は前述のハサン・オンバシュに聞いたところのアーのいない町ではなく、メメッドがまだ町も知らない少年の頃、ドゥルスンから聞いた平和な村である。ヤシャル・ケマルは「選ばれし者」に理想郷での牧歌的な生活を夢見させ、昔の感傷にひたらせる。しかし、メメッドに「選ばれし者」の重荷を放棄したことによる苦しみがあらわれる。それが、メメッドが男の幻覚と遭遇する場面だ。男の幻覚の登場は「選ばれし者」において重要な役割を演じている。男の登場により、メメッドはだんだんと崩壊し始める。村での理想の生活を手

に入れた一方で、メメッドは自身を見失っていく。メメッドと男の幻覚を順にみてみたい。

メメッドはケバブ屋で不審な男を見つける。

> メメッドは少し後で、顔を上げて向かいをみると、２つの当惑した目が自身に注がれているのを見た、その顔は青白くなった。メメッドはこの顔をどこかで見たことがあった。２つの目はお互いにしばらく見つめ合った。〔中略〕誰だったか、何をしている男だったか、知っていた、どこかでこの男と会ったことがあった、話した、しかし誰だったこの人は？（Ⅳ:110）

男は逃げ、メメッドは追いかけるが男にまかれる。

> メメッドが後ろを振り向くと、あの男がいた。男は低地の崖のそばに立っている、腕を組み、沈む太陽の方向に向かい、影は水路のがけの尖った石から東の崖の下、向かいの紫色の大きな花々から見えない丸い枝の前に落ちていた。そんな男を見てメメッドの心臓はあらん限りの速さでもって体をぶるっとさせた、手や足を温めるかのようになり、鼻に、あらゆる香りを通りぬけてエリカ[52]の香りがやってきた、メメッドの心はぱっと嬉しくなった。もう男を捕まえることができた、弓から放たれた矢のように男へと走った、男を捕まえようと手を伸ばした、手は何も掴まなかった。男はその瞬間消えた。メメッドは、何もないところに立っていた、右、左、前、後を見たが、誰もいなかった。幻でも見たのか、そう何度か呟いた。
> 〔中略〕また男を見た。男は頭の先からつま先まで真っ黒な服装をしていた。メメッドはこの男を知っていた。そう、とてもよく知っていた、さらにはこの男と話したことさえあった。誰だったか、誰だったか、この男は、何がしたかったのか？木に向かって走った。メメッドが向かってくるとき、男はその場から全く動かなかった。メメッドが近づくと、男は木の幹の後ろに逃げた。メメッドも…。男は木の幹の周りをすごい速さで回っている、メメッドも彼に追いつこうとしていた。〔中略〕メメッドは男に手を伸ばしたが、何もつかめなかった、男はメメッドの目の前から

---

52 イギリス・デンマークなどの荒地に茂る小低木。薄紅や紫がかった白色などで、つりがね形の小粒の花をたくさんつける。ヒース。〔シャクナゲ科〕『新明解国語辞典』

するりと、消えた。メメッドは驚いた様子で、木の下で呆然とした。希望はなくなった。ああ、拳銃を持っていれば、男を撃ち、足を撃てば死なないだろうから、そうして捕まえるはずだった。気になって死にそうだった、このとても親近感がわく人は誰だったか、いつ見たのか、こんなに良く知っているというのに。心の中に男に対する良く分からない愛情があった。ジンだったのか妖精だったのか、僕に何をして欲しかったのか、何か苦しみがあってそれを話すことができないでいたのか？もうこれからは拳銃を常備しようと考えていたところに、男の頭が水路の崖の中からイバラの間から見えた。精一杯の力で、怒りでもって、歯をくいしばりながら男に向かって飛びかかった。〔中略〕メメッドは、手を伸ばし、さあ捕まえた、というところで男は手の間からするりと抜け、二度と見えなくなった。こいつは人間ではない、ジンや妖精、羊飼いをからかう鳥、そうメメッドは考えた、ゆっくりゆっくり、疲れ果てた様子で村に戻った。（Ⅳ:147－148）

メメッドは男に親近感を抱いているが、誰であるか分からない。男が目の前に現れるたび、捕まえようとするが一向に捕まえられないでいる。

メメッドはここ数日エリカの香りの中にいる。アブドゥルセラーム・ホジャの家のベッドにあったエリカの香りを忘れられないでいる。エリカの香りは、子供時代を思い起こさせる。母親も枕の中やベッドの下にエリカを敷き詰めていた。メメッドはエリカの香りの中で眠っていた。朝は母親が調理する料理と花の香りが混ざりメメッドを幸せにしていた。エリカの香りはメメッドにとって平安な香りだ。『インジェ・メメッド』全四巻を通して、メメッドが一番ゆったりとした時間を過ごしているのは、第四巻の前半部分である。義賊をやめて、海辺で争いのない平和な生活が始まっている。エリカの香りはその象徴とも言える。

インジェ・メメッドはエリカの枝を探し見つけた。見つけると、胸騒ぎがし、嬉しくなり座った。今母親から生まれたばかりのようにキラキラしていた。（Ⅳ:601）

メメッドはアブドゥルセラーム・ホジャと家を見に行った帰り、再びあの男を目撃する。

メメッドは急に固まった。庭の、彼らが入ってきたとき開けたままにしていた門の真ん中で、あの男が突っ立っていた、挑戦するかのように。（Ⅳ:152）

メメッドは飛びかかったが、男はそこにはいなかった。〔中略〕サボテンの間に男を見たメメッドは、下に走って行った。彼が走れば走るほど、向かいの男も、メメッドとつながっているかのように走っていた。（Ⅳ:153）

メメッドは家を手に入れ幸せな生活を送っていた。しかし、男が現れないと、心の中に空虚を感じるようになる。

メメッドは、アブドゥルセラーム・ホジャの家で毎朝目を覚ますと、自分の家へ走った、庭の門を、音を立てずに鍵を差し、ゆっくりと開けた、家の前の持ち主である女は決まって、背を古いみかんの木にもたれかけて寝ていた。女が目を覚ますと隣に座り、たっぷりと真っ白な家を眺めていた。

メメッドの幸せは増えるばかりで減ることはなかった。あの男も辺りにはまったく現れなかった。メメッドはますますもって、あの男を待ちわびていた。（Ⅳ:155）

しばらく男はメメッドの前に現れない。だんだんと男を見つけることに狂い始める。メメッドはヒュル・アナ、セイランと海岸にやってくる、そこでも男の影を探していた。

海で、何度も上がったり下がったりしているかもめの側にある影を見た、すぐにあの男を思い出した。何だったか、何だったか、誰だったか分からない、誰に聞いても分からなかった。またもう一度目の前に現れるのだろうか？男がとても気になっていたので、たとえ撃つことになろうとも彼を捕まえ、誰なのか調べるはずだった。エフェンディ・ハズレットたち、もしくはヒュル・アナに男についてきくことが出来たなら、彼らも何か知恵を貸してくれただろう。しかし、なかなかこの事を誰かに話すことはできないでいた、何かに躊躇していた。（Ⅳ:234）

メメッドは町の教師ゼキ・ネジャドと親交を深め、彼のもとに通っている。ある日、道中ま

たあの男を見る。

遠くで、道の真ん中で１人の人間の影が歩いていた。メメッドは影が誰であるか、すぐに分かった、馬を走らせて彼に覆いかかろうか、躊躇した、馬を走らせるかわりに歩かせた。メメッドが速度を落とすと、少し後で慎重に彼を見ると、彼もまた速度を落とした。メメッドが（たづなをひっぱり）馬の上体を起こすと、影もその場にピタッと止まった。メメッドが馬を走らせると、すぐに影も歩いた。あたかもお互いにつながっているかのようだった、ひとりが止まると、もう一方も止まり、ひとりが歩くと、もう一方も…。このゲームは昼まで続いた。（Ⅳ:243）

男は、メメッドの馬を撃って逃げる。メメッド本人を撃つことができたのに、男はそうしなかった。メメッドは男のこの行動にいっそう混乱する。

季節は秋になる。メメッドはその後、三度男を見る。男が誰だか分からないのでメメッドは気が狂う、朝から晩まで男を捜し続ける。誰とも話さなくなる。

メメッドは夢遊病者のように、食事をとったのかとってないのかも意識せずに、食事をとり終えた。再び、夢遊病者のように起き上がった、まっすぐ寝床に入った。もう何日間もこの様子だった。誰の顔も見ずに、頭をたれて、海岸へ、作物の畑、庭、湿地と歩き回って、家に戻ってきて、食事をとり、寝て、朝早く起きだし、出掛け、どこへいったかはアッラーのみぞ知る、日の入りから２時間後ぐらいには家を思い出し、家に戻ってきていた。人間の種に嫌気がさしたような様子だった。ところで、あの男を、彼の馬の額から血を噴き流させた、あの奇妙な男は３度メメッドの前に現れた。(Ⅳ: 305 )

メメッドは、いずれにおいても男を捕まえることは出来なかった。

メメッドはあの男をこれ程まで良く知っていたのに、思い出せないので、ほとほと気が狂っていた。（Ⅳ:308）

メメッドはシャキル・ベイによって教師ゼキ・ネジャドが殺されたこと、村人が大変な不正義にあっていることを聞くと、奮い立つ。あの男を捜すことに狂っていたころのメメッドはどこかに行ってしまった。メメッドはシャキル・ベイを討ち、再び山へ戻ると、フェルハット・ホジャの徒党に入る。

> メメッドは馬に飛び乗り、真っ直ぐ馬を進めた。〔中略〕メメッドの頭に、あの黄色い光がまわり、輝き、散らばっていた。目にも、あの鋼の閃光が宿った。店にいた者たちは、彼がこのようになったので、驚いていた、互いに顔を見合わせていた。（メメッドは）シャキル・ベイの前にやってきて、ピストルを向けた、「外に出るんだ、シャキル」と、はっきりと、命令口調で、叫んだ、「立ち上がって外に出るんだ」　シャキル・ベイは、一瞬にして真っ青になり、手足を震わせ、死人のようになり、彼が言うとおりに、足をからませながら外へ出た。メメッドは、彼を広場へ、スズカケの木の下へと引きずった。町の者たちは、この様子を眺めていた、「あっ」とも言わず、一部始終を見ていた。シャキル・ベイをスズカケの木の下でとまらせると、彼の目をじっと見て、「これは教師ゼキ・ベイの」と引き金を引いた。「これはマラリアで死んでいった子供達の…」　もう一度引き金を引いた、冷血に。顔は笑っているようであった。「これはおまえの不条理を受けた農園労働者の」（Ⅲ：326-327）

メメッドをしとめようと、村々を荒らし、村人を村から追い出しているアリフ・サイム・ベイに不正義を感じたメメッドはベイを殺害することを決める。メメッドはムスリムを連れてアリフ・サイム・ベイを討ちに向かう。途中、彼らは星が輝き消えたのを目にする。同じ星はまた輝き、空を端から端まで輝かせて消えた。

> 「見たか」そうインジェ・メメッドは尋ねた。「見た」とムスリムは言った。「みてごらんよ、そこで、暁の星が輝いている」地上や空で一羽の鳥がチュンチュン鳴いている側を通り過ぎた。離れていても鳥のチュンチュン鳴く声は後ろの方から聞こえていた。鳥の鳴き声かやむと、あの星が再び見えた、端から端まで夜を輝かせながらゆっくりと流れていった。
>
> 「長い間山で過ごしてきたけど、こんな星は見たことがない」とムスリムは言っ

た。

「僕も見たことがない」とメメッドは返した。「これは暁の星じゃないな」

「この星には何かがある」

「何かあるにちがいない」とメメッドは言った。(Ⅳ:598)

第 1 巻、第 2 巻、第 3 巻と、権力者を殺害する前のメメッドの目には、「閃光」が宿った。第 4 巻では、「閃光」の代わりに星が輝く。この場面は、第 2 章でも触れた自然とメメッドの関係の象徴でもある。第 1 巻では、「閃光」が効果的に使われた。第 2 巻では、メメッドの絡まった心理が自然描写で表された。第 3 巻では義賊をやめる決心をしたメメッドの喜びが、「山々、雲、そこに流れる荒々しい風、音をたてる稲妻、雷」へむけるメメッドの愛しいまなざしで表された。第 4 巻では、エリカの香りに幸せを感じるメメッドの姿が描かれ、幻覚の男を探す苦しみは、メメッドの目による自然描写を暗くさせた。そして、最後の流れる星を見る場面において、メメッドの目に宿る光は星となる。メメッドは、より大きな世界と一体化するのである。

3.2.村人の視線

第 1 巻

アブディー・アーは、メメッドの恋人であるハッチェを、自分の甥と婚約させた。このことを聞いた村人たちは噂し始める。

「メメッドはハッチェを略奪する。アブディーの禿の甥になんかくれてやらない」

「恐がるメメッドは」

「まったく恐がらない」

「メメッドの目に誰も恐怖をみつけることはできない」

「みつけることはできない」

「これがメメッドだ！」

「メメッドなんて。メメッドはいくらになるか。アブディーは彼をこてんぱにやっつけて、死体を子分どもに始末させる」

「アブディーは一度怒ったことがあった…。その始末といったら…」

「メメッドは娘を奪い去る」

「どこへ行く？」

「どこへ行く？メメッドは行く所を分かっている」

「どこへ行ったとしても、蛇の穴に入ったとしても、アブディー・アーはメメッドを見つけ出す」

「アブディー・アーの守備範囲は広い。後ろ盾に政府がいる」

「政府もいる、知事もいる、役人もいる。警察署所長もいる」

「毎日役人は家にやってくる」

「ああ、心臓が砕けるよ、あのメメッドに」

「Geldi yabanın köylüsü de elinden aldı」[53]

「俺は昨日見た、メメッドを…」

「ああ！かわいそうな奴！」

「家々の裏で見た。顔は真っ青。毒の青色になっていた。青緑に」

「俺も彼の目が恐かった。彼の目には奇妙な光がある」

「かわいそう奴は娘の婚約が決まってからというもの家から出ないらしい」

「暗い隅っこで…」

「夜まで…。考えているらしい」

「はかない愛…。難しい！」

「はかない愛は狂わせる、人を」

「そもそもメメッドは半分狂っている…」

「娘を毎晩縛りつけるらしい、娘の母親は。手や足を麻で縛るらしい」

「鍵のうえにまた鍵！」

「ドネの状況も悪い」

「彼女も息子をおそれている」

「アブディー・アーも事を聞いたらしい…」

「ああ、かわいそうな奴、メメッド！」

「聞いたらしいが笑ったとさ…」

---

[53] 邦訳不明

「娘の両目は２つの噴水(チェシメ)…」
「ああ、かわいそうな奴、メメッド！」
「アブディー・アーの禿げの甥がやってきて、大手を振っている。村をうろうろしている」
「妻を寝取られた男…」
「鹿の角をもつ…」
「鹿…」
「不正な行為だ」
「ああ、かわいそうな奴、メメッド！」
「不正な行為だ」
「苦しみで死ななければ、メメッドが…」
「いやいや、娘が死ぬだろう、苦しみで」
「別たれるものは盲目であれ」
「ひとりひとり話しておくれ」
「彼らを幸せにさせることなかれ、インシャッラー」
「不幸な人生を送らせよ」
「狼よ食べるがよい、彼らの皮を、インシャッラー」
「蛇どもよ、出てきて、ずっととぐろを巻いてなさい」
「ひとりひとり…」
「彼らの目にはエリンギウムの茂みの先まで」
「5 つの村は村のもの、ほら、その山だって山のもの」
「この世はお金でもって買われる、勇敢さでは買われない」
「ああ、かわいそうな奴、メメッド！」
「見るがよい、アブディー・アー。見るがよい、メメッドは彼をどんな目に遭わせるか。あんたたちはちょっと黙って」
「殺害したら…」
「殺害したら、彼の手は輝く」
「メメッドはまだ子供だ」
「子供だが…」
「年に何頭のシャモアをしとめる、メメッドは？」

「数えてみろ！」

「針の穴をも抜ける、彼の弾は」

「アブディーの瞳孔も抜ける、インシャッラー」

「ひとりひとり話せ！」

「銃がメメッドの手にわたったとしても、撃たないよ、アブディーを」

「コジャ・アフメットが山にいたら、こんなとき…」

「村にやってきて、婚約を取り消し、娘を娶らせたはずだ、メメッドに」

「銃がメメッドの手にわたったら…」

「メメッドは正義でもってやってくる」

「ああ、もしも！」

「村人たちにそんな日が訪れたなら…彼らは四十日四十晩お祝いをする」

「はかない愛に焦がれる者たちを別つ者は間違っている」

「間違っている、インシャッラー」

「メメッドによって咎められなくても、アッラーによって咎められる」

「咎められる、インシャッラー」

「ひとりひとり！」

「どこにいるんだコジャ・アフメット。姿を現す日は今日だったのに」

「コジャ・アフメットはダーウスタンで土地を耕しているらしい。妻を恐れるようになったらしい」

「メメッドは町に行ったたらしい」

「地盤を固めている」

「あの禿げの甥に何かあったら…」

「雷が落ちたら、てっぺんに」

「訳もなく死んだら」

「死んだら…」

「メメッドが略奪したら、娘を。略奪したら、連れ去ったら…」

「メメッドが略奪したら、娘を」

「略奪したら、連れ去ったら、娘を…」

「俺はハッチェを知っている。彼女は自殺する」

「彼女が死んだら、メメッドも生きてはいられない」

「ああ、かわいそうな奴、メメッド！」

「ああ、かわいそうな奴、ドネ！未亡人となった、若い頃に。息子までなくすことなかれ」

「息子までなくすことなかれ」

ひとつの村の人々全体が話していた。メメッドの事は彼らの苦しみとなっていた。だが、何もなすすべはなかった。この会話はアブディー・アーの耳に、即座に入っていた。村で「あっ」と言ったとしても、彼は聞くのだから。起こったこと、村人たちが何を話していたかも、ひとつひとつ知っていた。（Ⅰ:88－91）

ここでは、村人のメメッドへの見方は、最初は分かれている。メメッドはハッチェを略奪するだろうとメメッドの勇敢さを信じる意見が出される一方で、アーの強大さを主張し、メメッドを肯定的に見ない意見も出る。しかし、否定的な意見は押しやられ、メメッドを支持する意見が優勢になる。メメッドがアブディー・アーを殺害したらと話は展開する。ここで村人の心の内に秘めた希望を見ることができる。メメッドがアーを殺害したら、平和になると考えている。四十日四十晩のお祝いをするだろうとしている。続いて、村人たちの間で英雄伝説として伝えられているコジャ・アフメットを持ち出し、彼がメメッドの助けになるのにと話す。ここではまだ、メメッドはコジャ・アフメットと比べられない程に小さな存在であることが理解できる。村人にとって、メメッドは勇敢な、また村の中でも銃を使うのが上手い子供であって、それ以上ではない。窮地に陥ったときに頼れる存在として村人が考えているのは、義賊をとうにやめたコジャ・アフメットである。

メメッドはアブディー・アーとその甥である婚約者を撃ち、ハッチェを逃がし、義賊となる。メメッドたちはアブディー・アーの家を襲い、その際出火した火が村全体に広がる。村人たちはメメッドが火をつけたと噂し、メメッドの名声が高まる。

ここ数日というものチュクロヴァ平原は震え上がっていた。インジェ・メメッドの名が噂されていた。村を焼き、家族をバラバラにするインジェ・メメッド！インジェ・メメッドは、アクトズル村を焼いた後に伝説となった。アクトズル村を見に来るものは何も知らなかった。アクトズル村の女たちや子供たちはそれぞれ、彼女たちを見にやってくる土地の村人たちにインジェ・メメッドのことを話していた。

「巨人のような男だった。大きなマツの幹に火をつけて、それを手にして家々をまわっていた。村を風のようにさすらっていた。火をつけた家の火が消えそうになると、すぐにやってきてまた燃やしていた。ああ、あなたたちもインジェ・メメッドを見ればよかったのに！夜の暗闇の中で、彼の目から光が散らばっていたよ。彼の背はポプラの木のように伸びたり縮んだりしていた。弾も彼には当たらなかった。彼の前に飛んでくる弾は飛び散り、効果がなかった」

別の村人たちも、また別の描写で、また別の解釈で、インジェ・メメッドについての物語を話し、話し、話していた。（Ⅰ:303）

メメッドはアブディー・アーの家を襲った際、アブディー・アーも死んだと考え、村人たちに土地を返そうと言う。このことを、ドゥルムシュ・アリが村人のパンジャル・ヒョスュクに伝える。

パンジャルはドゥルムシュ・アリに何も言えなかった。彼も驚いていた。後で、村にどれだけ人がいようと、ひとりひとりに事を説明した。いく人かは、ぱっとよろこんだかと思えば、考え出した。村全体が驚いていた。村人たちは、このありえない事を信じられずにいた。

家々の前で子供、女、男たちが驚いていた。人々は驚いており、話をしていなかった。ただ、おそるおそる互いの目の中を覗いていた。動揺した群集は、大きな静寂さの中、こっちの家からあっちの家へと、希望を胸に動いていた。（Ⅰ:313）

パンジャル・ヒョスュクから話を聞いた群集は、ドゥルムシュ・アリ[54]の家にやってくる。群集は、この話をにわかには信じることができず、黙り続けている。

「盲目になるがよいわ､何でじっとしているの、こんなふうに？何でじっとしているの？どの家でも誰か死んだかのように悲嘆して。盲目になるがよいわ。この者たちをみてみなさい！この者たちも男だって言うの！」女たちを見た：「あなたたちも、この者たちを男だと胸に抱いて寝ているの、ねぇ？おお、女たちよ。この馬鹿どもをねえ？何でじっとしているの、こんなふうに石になって？踊りなさい、笑

[54]ヒュル・アナの夫

いなさい、祝いなさい」

群集は石のように固まっていた。

「アッラーよ、呪いをかけたまえ。あなたたちは聞かなかったの？インジェ・メメッドはアブディー・アーをドンパチと…」

群集はゆっくりと波打った。

「ドンパチ…。アクトズル村は頭から足の先までドンパチ…。聞かなかったの？昨日もメメッドはここに来た。今は中にいる。聞かなかったの？これからは働き、働きアブディー・アーに差し出すなんてことはない。畑も私たちのもの。バチバチ…。雄牛も私たちのもの。ドンパチ。アクトズル村もパチパチ」

群集は波打った。最初はつぶやくような声が群集から出た。つぶやき声は大きくなり、口々に言い始めた。村は信じられないくらいの騒ぎとなった。犬は吠え、おんどりは鳴き、鶏はあっちへこっちへと走り回った。子供たちは泣きあった。物置ではロバが、馬が、いなないていた。デーイルメノルク村は、村ができて以来の騒がしさだった。

すこしたつと、村からは埃が立ち上がった。村は埃まみれとなった。

後で、突然、村の中央から、喜びの叫びが聞こえはじめた。

ダウルやズルナがはじまった。歌がはじまった。

「我らがインジェ・メメッドよ」

「我らがインジェ・メメッドよ」

「彼がこんな男になることは、子供の頃からはっきりしていた」

「はっきりしていた」

「雄牛も我らのもの」

「みんなが種をまいてきた畑に、思うように種をまくのさ。3 分の 2 を差し出すなんてこれからはないのだから」

「これからは飢えることもない、冬の真っ只中に」

「子分みたいに懇願することもない」

「我らがインジェ・メメッドよ」

「牛を売ることもない」

「不正もない」

「みんな行きたいところに行くのさ」

「みんな家にお客だって呼べる」

「みんなが望んでいた…」

「みんな自分自身がしたいように」

「我らがインジェ・メメッドよ」

「ドンパチ、ドンパチ」

「チュクロヴァはインジェ・メメッドをおそれ、震えている」

「我らがインジェ・メメッドよ」

「ドンパチ、ドンパチ」

「ハッチェは刑務所から出てくる」

「５つの村でお祝いとなる」

「我らがインジェ・メメッドよ」

「メメッドのお祝いは５つの村がやる」

二日二晩、ダウルやズルナを休まず鳴らした。他の 4 つの村もお祭り騒ぎだった。哀れを誘うダウルの音がその辺りからも聞こえていた。夜はディケンリデュズ全域が光の下にあった。歓喜は石、土、水、木に染み込んだ。（Ⅰ:314－315）

デーイルメノルク村の村人は、土地が自分たちのものになるという知らせを、最初は信じられない。村人が何の反応も示さないのでドゥルムシュ・アリの家にいた女は怒り出す。村人たちは、「…聞かなかったの？インジェ・メメッドはアブディー・アーをドンパチと…」という言葉を耳にすると、状況を把握する。村はお祝いとなる。この場面で、『インジェ・メメッド』において、はじめてダウルやズルナが登場し、5 つの村は歓喜のお祭り騒ぎとなる。「彼がこんな男になることは、子供の頃からはっきりしていた」とあるように村人にとって、メメッドは以前の「メメッドはまだ子供だ」という存在ではなくなっている。村人の中で、子供だったメメッドは「我らがインジェ・メメッド」へと変化し、村人を苦しめるアーを退治し、土地を取り戻してくれる強い存在となっている。

メメッドたちは村人が見守る中、イバラの茂みに火をつける。火とともに村人たちは歌を歌い、ハライを踊りはじめる。

その晩は朝まで、一晩中、炎はディケンリデュズで、クナルテペからユルドゥズ

テペ、水源からカバアー、他の村々、そして遠く下の方まで、チュクロヴァ平原まで広がった。巨大な明るさが平地に広がっていた。後になって、アリダー山の頂上で丸い炎が見られた。大きな丸い炎。彗星のように回り、火花を散らす丸い炎…。アリダーの頂上は日が当たったかのように一気に輝いた。輝き。村人たちはこの出来事に驚いた。メメッドも驚いた。そこに、アリダー山の山頂に、初めて炎が見られた。（Ⅰ:317）

デーイルメノルク村と他の４つの村が、ダウルやズルナを鳴らしお祝いをしたこと、イバラの茂みに火がつけられ、その炎が広がったこと、アリダー山の山頂で光が光ったこと、これらのモチーフは村人の最上級の喜びを表すものとして、この後も度々使われる。

祝宴が催され、村人のインジェ・メメッドへの崇拝心、忠誠心は確立される。村人はインジェ・メメッドの場所を聞かれても答えず、メメッドの活躍に関する物語・民謡が次々と現れはじめる。

カライジュにインジェ・メメッドを罠にかけるよう頼まれたホラリ[55]は、メメッドを探し、村々を尋ねてまわる

ホラリはまず、デーイルメノルク村で聞いた。「基地はアリダー山だ」、そう村人たちは言った。ホラリは何日かアリダー山をまわった。見つからなかった。狂った。ディケンリデュズから上へと、マズルーの平地へ出た。またもや見つからなかった。誰に、どの村人に聞こうと、村人はまず馬鹿みたいに彼の顔をみて、そうして：

「インジェ・メメッドだって？」、そう尋ねてくるのだった。「インジェ・メメッドだって？そんなの見てない、知りもしない」

インジェ・メメッドの名前を聞いて、愛情を感じない者は山の村々にはいなかった。そのため、インジェ・メメッドの居場所を知っていたとしても、誰も知らせてはこなかった。知らせることはしない。というのも、これは昔からの伝統だった。だから、愛されている義賊の居場所を見つけるのはたやすいことではなかった。（Ⅰ:323）

55 デーイルメン村の村人。メメッドを裏切って、カライジュとつながっている。

アブディー・アーとアリ・サファ・ベイの命を受けてカライジュがメメッドをだまして、待ち伏せをしたこと、インジェ・メメッドはこの待ち伏せをものともせずくぐり抜けたこと、さらにカライジュに怪我を負わせ、仲間２人を撃ったことは、カディルリからコザンへ、ジェイハンからアダナへ、オスマニエへとチュクロヴァ全域に伝わった。

チュクロヴァやトロスでは、インジェ・メメッドの活躍は誇大化され噂となり広まっていた。みんなインジェ・メメッドの味方であった。山の民衆は、伝わってくるメメッドの活躍を聞き、どれ程危険なことがあろうと、彼を敵から守ることができた。　どれほど高くついたとしても。

「インジェ・メメッドだって？」　こう言っていた。「インジェ・メメッドと言われるのは小さな子供。だけど、頭のてっぺんからつま先まで勇敢だ…。（彼は）アブディー・アーによる母親の死を無駄にはしない。アリ・サファ・ベイがワイワイ村にしたことの恨みも忘れはしない」

インジェ・メメッドとカライジュの争いの影響を受けたのはワイワイ村であった。知らせが村に届いたのは夕方だった。みんなして、していたことを放り出し、広場にやってきた。村人は喜んでいた。村人にはもはや後ろ盾がいた。インジェ・メメッドのような後ろ盾…。村人は活気付いていた。みんな、インジェ・メメッドについて、何かしらでっち上げていた。短い間にインジェ・メメッドは伝説化してしまった。インジェ・メメッドに関するたくさんの英雄的行動や出来事をでっち上げたものだから、（インジェ・メメッドが）10 人いたとしてもこれ程のことは到底成し遂げられなかったほどだった。しかし、村人はそんなことを考えられる状態ではなかった。村人の敵やカライジュに立ち向かうインジェ・メメッド！（村人たちは）２年間もカライジュを恐れる余りに村から外に出ることはできなかった。アリ・サファ・ベイは村人の畑を取り上げていた。だからといって、村人たちは町に出て行き、権利を主張することはできなかった。あと 6 ヶ月遅かったら、畑はみんなアリ・サファ・ベイのものになっていた。奴隷になるところだった。（Ⅰ:333）

村人たちは、インジェ・メメッドを救世主と信じ、忠誠を誓う。彼らはインジェ・メメ

ッドが捕られないように、彼を守る行動に出る。

> 村人たちは憲兵らに懲らしめられ休みなくうめいていた。メメッドを追いかける憲兵は厳格な命令のもとにあった。「インジェ・メメッドを生きたままでも死んだ状態でも、とにかく連れてくるんだ。さもなければ！…」　さもなければこうであった。このような命を受けたものは、どの村に行ったとしても、その村を大混乱に落としいれていた。叩かれなかったものはいなかった。みんな、山の村全体から、「ああ」、「わあ」と声がしていた。残酷だ。誰もインジェ・メメッドの居場所を知らなかった。誰も彼を探しに行かなかった。道を示すものも、間違った道を教えていた。メメッドが無実の娘を刑務所から救い出したことは、山の村々やデーイルメノルク村で伝説がまた伝説となっていた。みんな仕事もしないで、あらゆるところでインジェ・メメッドの噂…。ハッチェを憲兵から助け出したことについては、おそらく 1 日に 10 曲は民謡が生まれていた。（Ⅰ:377）

村人はヒュル・アナの指示のもと、アブディー・アーに反抗する。

秋になり農作物を取り入れる時期になると、ヒュル・アナは村人に不作だったといって、収穫したものをアブディー・アーには差し出さないよう指示してまわる。村人は指示通り、アブディー・アーに小麦ひと粒たりとも差し出さなかった。このことに腹を立てたアブディー・アーは、デーイルメノルク村に憲兵を送り、憲兵は村を懲らしめる。

> （憲兵は）ヒュル・アナを小屋に監禁した。ヒュル・アナや村人たちの口からは一言も出てこなかった。たたかれ、悪口を言われ、羊のようにあっちからこっちへ引きずられようと、彼らの口からはどんな小さな声もでなかった。5 つの大きな村は、みんながみんな言葉を口のきけないものとなった。（Ⅰ:395－396）

インジェ・メメッドの足跡が見つかったことが憲兵のアスム・チャウシュの耳に入る。アスム・チャウシュはメメッドがいるとされるアリダー山へ憲兵を向かわせる。そのことを聞いた村人はインジェ・メメッドが捕らえられてしまうのではないかと心配する。

一瞬にして村全体が震え上がった：「インジェ・メメッドの足跡が見つかったらしい。足跡が見つかったらしい！」
村全体が、男も女も、みんな、アリダー山の裾野まで憲兵の後を追って歩いた。そこで、裾野で、足跡のはじまりのところに山のように集まり、足跡を見ていた。（Ⅰ:402）

メメッドが撃たれたという知らせが村に届くと、村人たちは落胆を隠せない。

知らせは村へと、村から町へと一瞬にして伝わった。「インジェ・メメッドが撃たれたそうだ。アリダー山の吹雪がおさまったら、死体を運び下ろすらしい」
デーイルメノルク村の目はアリダー山の吹雪の吹く山頂に注がれていた。アリダー山は山の中の山…。アリダーはとてつもなく恐ろしい。アリダーはインジェ・メメッドをのみこんだ。
みんな家に閉じこもってしまった。アブディー・アーを待っていた。知らせを受けていたのなら、そろそろ来るはずだった。
インジェ・メメッドが撃たれたという知らせはワイワイ村にも届いた。コジャ・オスマンはその知らせを聞くと倒れこんでしまった。生気を失った。一時は口も聞けなかった。目からポロポロと涙が流れ出ていた。（Ⅰ:408）

義賊たちにも近いうち恩赦が出るという噂が村々に広がる。村人たちは、このうわさを喜ぶことができない。村人たちにとってインジェ・メメッドは、山でアーたち抑制者を威圧してこそのインジェ・メメッドだった。

デーイルメノルク村やディケンリデュズの村人全体は恩赦の知らせを喜べなかった。メメッドが山を下りれば、アブディー・アーは村へまた帰ってくるはずだった。村人たちはそれを恐れていた。
「恩赦っていうのは一体何だっていうんだ。義賊は義賊なんだから、山を徘徊するのさ。自分がメメッドだったら山を下りないよ。わしらみたいな村人になって、一体何をするっていうんだ。みんな彼を恐がっているっていうのに」（Ⅰ:413）

恩赦を受け、村にやってきたメメッドを村人たちがみつける。村人たちは、不安を隠せない。

村人たちはみんな広場に集まっていた、死人のように、静かに、身じろぎもせず、そんなふうにじっとしていた。

アブディー・アーを討ち、ヒュル・アナに別れを告げるため村に戻ってきたメメッドを見て、村人たちはうって変わってメメッドを強い勇者と見る。

村人たちは、メメッドを広場で、馬にのって直立して、岩のように力強く思った。ゆっくりと、静かに、みんなして、老いも若きも集まってきた。大きな輪となった。あたりでは何の声もしなかった。息をするのさえ聞こえるほどだった。彼に注目していた。〔中略〕

土を耕す時期であった。ディケンリデュズの 5 つの村が集まった。若い娘らはここ一番の晴れ着を着た。年をとった女性らは純白の、コショウボクのように白いスカーフを巻いた。ダウルが鳴らされた…。盛大な祝宴となった。ドゥルムシュ・アリまでもが病気にもかかわらず踊りを踊った。朝になると、みんなしてチャクルディケンリーに行き、火をつけた。（Ⅰ:421）

第 2 巻

コジャ・オスマンは、アーを殺害した後に自分を頼って村にやってきたメメッドを家にかくまう。しかし、メメッドはこっそり出て行ってしまい、それを知ったコジャ・オスマンは倒れる。この噂を耳にした友人や村人らはコジャ・オスマンの家にやってくる。

「村人は、インジェ・メメッドと聞くと、喜び驚いた、今も驚いたかと思えば喜び、喜んだと思えばおそれていた」（Ⅱ:116）

インジェ・メメッドが自分たちの村にやってきたことを聞いた村人たちは喜び、そしてなぜインジェ・メメッドに会わせてくれなかったのかとコジャ・オスマンを責める。

その日、村人たちは希望を持ち、衰弱し、怒り、喜んでいた、そうした中でインジェ・メメッドについて話していた。娘や若者の中には、インジェ・メメッドの歌をぶつぶつ歌うものもいた。

後になって、コジャ・オスマンを怒り始めた。インジェ・メメッドがやってきたというのに、村人たちに知らせずに、偉そうに、口から煙を吐き出しながら、コザノールのように村を歩き回りやがって。倒れているがよい、老人め！何もしやしないんだから、インジェ・メメッドの知らせを村に知らせてくれたっていいのに、みんながインジェ・メメッドを見ることができるように」

悪口や、怒り、傷つき、畏れはみんな、コジャ・オスマンに向けられた」（Ⅱ:117）

インジェ・メメッドがワイワイ村にやってきたことは、あっという間に近隣の村々へと広がる。

インジェ・メメッドがコジャ・オスマンの家に来たこと、そこで6ヶ月隠れていたこと、昨日コジャ・オスマンと喧嘩して山へ入ってしまったことはワイワイ村からケスィックケリへ、ケスィックケリからハミテへ、ボズクカヤ、アクマシャタ、ナルルクシュ、オクスズル、チュヤンル、そこからハジュラル、アナヴァルザ平原一帯へと広まった。

誰一人としてインジェ・メメッドという言葉を使わず、彼だとか、ハヤブサだとか言っていた。

アナヴァルザ平原一帯、他のチュクロヴァの村々、コザンの６つの村は毎日のように、インジェ・メメッドの勇敢さや伝説を話題にしたが、アーや政府関係者の耳には入らなかった。平原の村々は一番神聖な秘密を隠すかのようにインジェ・メメッドの名前を隠していた。コジャ・オスマンがこのことを知っていれば、嬉しさで狂っていただろう(Ⅱ:118)

村人たちはコジャ・オスマンに文句を言う。

村人には明らかに変化が起きていた。みんな活気付いていた。家々を回り、笑っていた。

コジャ・オスマンへの文句：「盲目になってしまえ、コジャ・オスマン、嫉妬してインジェ・メメッドを見せなかった。盲目になってしまえ、盲目になってしまえ、わしらが彼のバラのような顔をちょっと見たぐらいで何がおこったというんだい」、そう村人らは言っていた。「自分ひとりで見て、あの嫉妬屋め」

「他の人がみたって、何も起こらないっていうのに」

「人っていうのは大きくなればなるほどケチになるっていうだろう」

「3 日間、パイプをくわえて、村を歩き回っていたんだ、スルタン・スレイマンっぽく、そんなすすだらけで」

「コジャは倒れていればよい…ハヤブサを巣から飛び立たせたと思えば、ハヤブサは地面に落ちてしまった」

「落ちるがよい！」

「落ちればいい、それでもって死ぬがいい」

「寿命が短くなったって、村人があの美しい顔をみたって、彼がどうなったっていうんだ」

「コジャ・オスマンを頼って、コジャ・オスマンの家にやってきたんだとさ…」

「なのに、村人にどうして嫉妬するんだい」

「(コジャ・オスマンは）倒れたらしい、インシャッラー起き上がらないよ」

「どんな男だったのだろう！」

「どんな良い顔をしていのだろう！」

「闘いになると、彼の銃は20尋(ひろ)も伸びるらしい」

「彼は弾を通さないらしい」

「アスム・チャウシュは彼が寝ているところを捕らえたらしい」

「彼はそれぐらい寝ているらしい…」

「彼は何も知らない」

「まったくもって赤ん坊みたいに」

「アスム・チャウシュは憲兵の分隊にこんな命令を出したらしい：そいつの腹に撃ちこんでしまえ…」

「弾という弾を撃ったらしい」

「ふと、見ると…」

「見ると！」

「弾は彼に当たっていない」
「当たらない！」
「当たるもんか」
「当たりはしないさ」
「人生が短くなればいい、コジャ・オスマン、我らのアーを見せなかったもんだから…」
「我らの愛しい…」
「我らの若者…」
「我らのハヤブサ…」
「我らのバラ…」
　また村人らは偉そうにコジャ・オスマンを怒っていた、悪口を言っていた、しかし、とにかく彼は彼らの村にやってきたのだ、十分だった。知っていたら、ちょっとばかり彼の顔をみたって、何があったっていうんだい、だろ？
　村人たちは安心していた。アリ・サファへの恐れは、ここ４，５日消えてしまっていた。そんな男がいたかな、忘れられていた。村中はお祝い、お祭りの様相を呈し、村人らを活気付けていた。
「オスマン・アー、どうして彼が村にやってきたことをわしらに知らせてくれなかったんだい？」
「恐かったよ、我らの若者よ、恐かった」
「わしらが彼に何をしたっていうんだ？彼は目に入れても痛くないっていうのに」
「村人はコジャ・オスマンに怒っている。見てご覧よ、彼が去ったのにも関わらず村人は活気付いた。彼がやってきたことで…」
「誰にも話しはしなかった。アーや政府が聞いたとしたら…村を包囲し我らのハヤブサを殺しただろう。だからそんな、話すなんてこと」
「わしらは彼をシャーやパーディシャーに渡しはしなかった。わしらが犠牲となっても彼を渡しはしなかった」
「そんなこと知らなかった、鳥が一羽やってきて、枝に隠れていたなんて」
「彼に弾は当たらないんだから…」
「軍に対して正面きって立ち向かうんだ、彼は」
「ゲンチオスマンさ、彼は」

「そんなこと知らなかった、子供たちよ、知らなかった」

「ありえないよ、鼻の先を見せなかっただろう、わしらに」

「彼自身が望まなかったんだよ。後ろには軍や憲兵がいた。何ヶ月も食事をとっていなかった、骨と皮だけだった。こんな僕を村人には見せないでおくれ、オスマンおじさん、そう言ったんだ私に」

「わしらは彼に食事を食べさせ、脂やはちみつを食わせてやったのに」

長い間村人は彼を見なかったことを悲しんだ。コジャ・オスマンに悪態をつき、問いただした。なぜ、なぜ村人は彼を見なかったのか？こんな機会はまたやってくるのか？近くの村もコジャ・オスマンをとがめた。女たちは、怒った。

後になって、彼をワイワイ村で見た者たちが現れた。彼をどんなふうに見たのか、みんなに話しはじめた。コジャ・オスマンは病床で、忘れられた。彼を見たものはみんな、それぞれの話をしはじめた。（Ⅱ:166-168）

次々にメメッドを見たものが現れ、最後にはワイワイ村や他の村でメメッドを見なかったものは本当に少数となった。コジャ・オスマンについては忘れられ、村はメメッドの話で活気付く。

村の子供達はみんな彼を見ていた。朝から晩まで彼について話し、彼にどっぷりつかり、彼の遊びをしていた。子供たちも大人たちのように、彼の名前を言うことなく、遊ぶときは彼に様々な名前を付けていた。遊びでは、アーたちや憲兵はとても恐がり、震え上がっていた。彼を目の前にして、立っていられずに地面に倒れ、懇願していた、彼の足にキスをしていた。子供たちはのた打ち回り、鼻を拭き、すすり泣き、地面で卑怯なやつ遊びをしていた。

次々と彼に関する歌が生まれだした。哀しみをもつ挽歌や畏敬の念を起こさせる伝説、滑稽な歌、遊びの歌…。子供たちまでもが彼のために歌のある遊びをつくった。（Ⅱ:169 ）

再びインジェ・メメッドが現れたという噂がでると、アーによる不正に苦しんでいたワ

イワイ村は一転、喜びにわく。

ワイワイ村においても、畑から畑へと歌が飛んでいった。インジェ・メメッド、アー、ベイ、憲兵に関して。インジェ・メメッドについて歌われた歌は称賛や温かいもの…。アー、ベイ、ジャンダルマについて歌われた歌はあざ笑った、挑戦的なもの…・

数々の物語も山々から平原へと下りてきていた。様々な信じられない物語。（Ⅱ：238）

（インジェ・メメッドについての）知らせは、ある人から、旅人から、子供から、女から、どこからともなく出ていた。誰もそれについて詳しく調べることはしなかった。訪ねて調べ上げるなんて事は思いもしなかった。とにかく知らせがどこからでもやってくればそれでいい。誰も知らせはどこから来たかなど気にしはしなかった。村人がインジェ・メメッドの知らせをもらってさえいれば、どんな知らせでもいい、そんなこと誰も気にしはしないのだから。（Ⅱ：239）

メメッドがワイワイ村にやってきたのをフェルハット・ホジャ、コジャ・オスマンが見つける。村人たちも集まってくる。メメッドは疲れきっていて、洋服はボロボロになっていた。メメッドを初めて見る村人たちは、話に聞いていたインジェ・メメッドとは違うメメッドの姿にショックを受ける。

後で、群集は話し始めた。誰一人としてインジェ・メメッドという言葉を使う者はおらず、みんなハヤブサだとか彼だとか言っていた。彼らは次々に話していた。彼をはじめて見た際、あっけにとられた。彼を見ては、これがインジェ・メメッドだと、そう言っていた。このちっちゃな、かわいそうな、せむしの、気を失った子供がインジェ・メメッドだと？

群集はコジャ・オスマンの家の前になだれ込んだ。また黙ってしまった。しばらく、立ちすくみ、垣根のところに座り、垣根にもたれかかり、そして黙っていた。子供たちさえも話していなかった、赤ん坊も泣いていなかった。（Ⅱ:279）

メメッドは介護され、そのまま眠りについた。朝になっても群集はショックを受けたまま、黙り込んでいる。そんな彼らに 1 人の村人が言う。

「何が言いたいって言うんだ？」「頭が回らない者たちだ！ハヤブサは小さいけれど、獲物は離さない。山で軍と闘ってたっていうじゃないか、大軍と闘ってきたんだ。なんでそんなふうにしゃがみ込んでいるんだ？何で失望なんかして？彼はやって来たじゃないか…。ワイワイ村と言ってやって来たじゃないか。我らの助けに間に合ったじゃないか。ハヤブサは小さいけれど、鷹はハヤブサと闘えない。この没落した不幸者たちが！」（Ⅱ:280）

そう言われると、群集はしだいに活気を取り戻し、希望や喜びが溢れ始める。みんなして笑い始める。

その日はどの家でも、いちばんの料理が作られた。家から家へと冗談が回った。冗談に対して、聞いたこともない悪口が、辺りを鳴らした。夕方頃、事の全てを聞いたアブダル・アシュルはダウルを手に、息子と共に村に向かった。ハライがすぐに始まった。夜にはスィンスィン[56]が踊られた。夏の夜のべっとりとした暑さの中で、脱穀場の火の傍で、暑さで汗をかきながら回り、おそらくこの村ではじめて踊られるスィンスィンであった。夏にお祭りや宴会は行なわれない、行なわれたとしてもスィンスィンは踊られなかった。ナルルクシュ、ヤルヌズドゥット、オクスズル、アクマシャット、スフメメットリ、デデファクル村もメメッドがワイワイ村にやってきたことを知った。すぐにその日のうちに、彼らも馬や車に乗ってワイワイ村にやって来て、お祭りに加わった。来なかった者たちも、それぞれの村で喜んだ。（Ⅱ:281）

村人たちは、想像していたのとは違うインジェ・メメッドに落胆を隠せないが、「インジェ・メメッドはやって来たじゃないか！」と誰かが言うと、重い雰囲気は一転してお祝

[56] Sinsin.夜に火を囲んで、若い男がダウルやズルナの演奏と共に踊る、民衆の踊りのひとつ。

いの空気へと変わる。

インジェ・メメッドは怪我を負い、菜園で休養していたのにも関わらず、チュクロヴァの各地でインジェ・メメッドが出現していた。村には各地で活躍するインジェ・メメッドの知らせが届いていた。メメッドの伝説は日に日に大きくなっていった。ユズバシュ・ファルクは村々を回り、インジェ・メメッドのことを村人らに聞いて回るが、村人らは皆メメッドの名も聞いたことがないと答え、拷問を受ける。

「インジェ・メメッドの居場所を教えるんだ、さもなければ、おまえたちを皆殺しにしてやる」

「インジェ・メメッドなんて見たこともないし、知らない、名前すらきいたことない」

村人らは泣き、痛がり、もがきわめいていた。だが、彼らの口からこれ以外の言葉は出てこなかった。

「インジェ・メメッド、我らのハヤブサ」（Ⅱ:388）

メメッドが、アリ・サファ・ベイ、続いてハムザを討つと、村人たちは祝宴を開く。

ある朝、まだ日は昇っていなかったが、村人の耳に、村の真ん中から暁のダウルの音が入ってきた。ダウルは重く、確かに、哀れを誘う調子で鳴り響いていた。

ダウルを鳴らしているものがアブダルオールであることはすぐに分かった。ズルナは彼の息子ジュメッキが吹いていた。そのことも分かった。なぜならトロスにおいてこのようにダウルを鳴らすアブダルは彼をおいてはいなかったからだ。

アブダロール・バイラムは息子と共にダウルを鳴らし、休んでは起きて

午前中には村人たちはそれぞれ広場に集まってきた。清潔だった、体を洗い、清めていた。一番のお祝いの服装をしていた。

老女たちは真っ白のスカーフを、若い女たちは頭に朱色の vala[57]を巻いていた。朱色、緑色、紫色に着飾っていた。ヒュル・アナは今日は花のようであったので、

[57] 巻物だと推測されるが不明。

これ程の人ごみの中においても容易に見つけることができた。

（村人たちは）やってきて、集まり、村の広場を埋めつくした。広場で人から針を落としたとしても、地面に落ちることはなかった。すこしたつと、群集もバイラムと一緒になってジュメッキの踊りに加わった。村の広場で、大きな歓喜とともに回った、そして踊りながらエリンギウムの野に向かっていった。

バイラムのダウルの音は向かいのディケンリデュズの村々でも聞こえたらしく、そこでもダウルが鳴らされた。彼らもエリンギウムの野へ向かった。5 つの村の 5 つともやってきた、東で、エリンギウムの野の端で、アリダーの裾野で落ち合った。若い男たちは大鎌をとり、エリンギウムを刈った、若い女たちは刈られたエリンギウムを集め大きな山とした。バイラムはダウルとともに山の上に飛び上がり、村人たちがこれまで見たこともないような踊りを始めた。伸びたり、小さくなったり、回ったり、手や腕を曲げながら、昔の踊りを踊っていた。彼が踊っているとき、彼の ışmar[58]の上に下の山をくっつけた。バイラムはしばらく炎の真ん中で、炎に呼応しながら踊っていた。彼は波打った。そして、まっすぐ立つ火の中から出てきて群集に混じった。

炎は積み上げられた山から平原へ飛んだ。乾燥したエリンギウムの野は頭からつま先まで、一瞬にして炎となった。北西の風も吹いていた。風は炎を巻き込み、飛び散らせ、あおぎ分けながら、遠く南へ運んだ。エリンギウムの野から割れる音がし、叫び声は夜の間続き、炎は端から端まで平原を走り回っていた。朝になるころ、ディケンリデュズ全体が炎に包まれた、平原は炎の激流に震えていた。（Ⅱ:430）

第 3 巻

アスム・チャウシュとユズバシュは義賊 9 人を殺害する。その義賊 9 人の中に、インジェ・メメッドがいるのかどうか気になる。インジェ・メメッドを知るエミシュ・ハトゥンが 1 人の義賊を指し、彼がインジェ・メメッドだと言い、挽歌を歌い始める。村の他の女たちもやってきて一緒に挽歌を歌う。アスム・チャウシュとユズバシュは、死んだ義賊がインジェ・メメッドだとは信じていないが、女たちが義賊に対し挽歌を歌うことに驚いている。

58 衣服だと推測されるが不明。

（女たちは）インジェ・メメッドの勇敢さ、繊細さ、整った顔立ち、愛情、ハッチェのこと、アブディー・アーを殺したこと、村人たちを救ったこと、空の天使が彼を連れて行くであろうこと、天国の門は彼がまだ遠いところにいるあたりから開くであろうこと、彼は緑色をした 40 人の聖者たちにもうすでに加わっていることを歌っていた。（Ⅲ:114）

ユズバシュは群集の端で急に立ち止まった。女たちはどんどん増え、インジェ・メメッドに向かって挽歌を謡い続けていた。事をしった他の村人たちも、老いも若きも女も男も、子供も集まってきていた。（Ⅲ:115）

チチェクリデレ村のマフムート・アーはインジェ・メメッドとその仲間をついに捕まえる。チチェクリデレ村はその知らせを聞き、静寂に包まれる。村の女たちはこそこそ話し出す。

「インジェ・メメッドを吊るし上げにするらしいわ」
「あのときは素晴らしい挽歌を彼に歌ったのに」
「今回は私たちの村で捕まった」
「のろわれた、不吉な村とされる…」
「インジェ・メメッドが吊るし上げにされたら…」
「インジェ・メメッドが吊るし上げにされたら…」
「空から石、火、蛇、ムカデ、龍、ミミズが降ってくるわ」
「インジェ・メメッドが吊るし上げにされたら…」
「この村、この世界…」
「この大きなビンボアーは崩壊する」
「土地からは血が噴き出る、水のかわりに」
「永遠に」
エミシュ・ハトゥン、後に続いて７人の若い女たちは、村を歩き回っていた。
「これは私たちらしい？」
「私たちの村はインジェ・メメッドが捕まった場所、そう永遠に名をとどめる」
「インジェ・メメッドは私たちのせいで吊るし上げにされる」

「サル・チャウシュも殺害した、あの無慈悲なやつは」

「昔は馬に噛ませて殺していた」

「今は自分が噛んでいる」

「馬の代わりに」

「あの世に着いたら、どう死人の顔をみる？」

「子供たちの…？」

「みんなの…？」

「ほら、その偉大なトロスの山々の…？」

「地中海の綿花畑…？」

「収穫したチュクロヴァの土地をどう見る…？」

「人はこのことで永遠に私たちを咎めない？」

「人に何て言えば？」

暁の光が輝き始めるころだった。村の女たちはみんな静かに集まっていた。マフムート・アー家の門のところにいた。3 人の女は銅製のお盆を手に、お盆には食べ物があった。女たちはみんな白いスカーフをまとっていた。（Ⅲ：570-571）

女たちは食事を持ってきたと警備員を取り囲む。そのうちの何人かが、そのまま建物の中に入り、メメッドたちの紐をほどき、彼らに服と武器を渡し、逃がす。警備員を取り囲んだ女たちは、何事もなかったように食事を振舞った。

メメッドが、チチェクリデレ村のマフムート・アーを討つと、村は祝宴を開く。

メメッドは馬をユルドゥズ山へ向け、村の中から赤褐色の風のように走り去った。残された村人たちは、しばらくの間、そこから少しも動けないでいた。メメッドが見えなくなるまで、後ろから見ていた。

昼ごろに、村へ良い知らせと一緒にダウル演奏者のアブダル・バイラムとズルナ演奏者のジュメッキもやってきた。知らせを受けたほかのトロスの村々も山々や平原からチチェクリデレ村へと流れ込んだ。チチェクリデレ村が、これほど人で混んだことはなかった。岩場や下の平原は人々でいっぱいになった。夜は朝までダウルが鳴り、ハライが踊られた。とてつもないお祭り騒ぎとなった。トロスは今までこ

れほどのお祭り騒ぎとなったことはなかった。

朝になり、明るくなると、サル・チャウシュを寝床から起き上がらせ、脇にかかえて、群集の中へと連れて行った。サル・チャウシュは：

「男ども」、「他の村の村人たちは、インジェ・メメッドは馬に乗っていってしまったので何かするようだ…」

この言葉に対して若者たちは向かいの露出した広い山腹へ引っ込み、少しするとピンク色、黄色、赤色の乾燥したエニシダで山をつくった、サル・チャウシュはマッチをこすり、山の束に火をつけた。村人たちは山腹を埋めてしまっていた、針を落としたとしても人をすり抜けて地面まで落ちないくらいだった。アブダロール・バイラムはダウルを鳴らしながら、踊りながら、炎にあるときは飛び込み、またあるときは飛び出し、そうしてあの昔の踊りを踊っていた。女たちは、手を互いにつなぎ、今まで見られていない大きなハライを踊った。炎は束から山腹へと広がり、山全域を一瞬にして覆った。山は炎でまわりながら震え上がった。（Ⅲ:602－603）

第４巻

メメッドは義賊をやめた。メメッドは村に現れなくなった。その頃、インジェ・メメッドと名乗る若者が次々に登場する現象が起きていた。

トロスの山々では若者という若者はインジェ・メメッドと名乗っていた。もしくは、噂によるとその山々では子供も若者も老人も、男と言う男は自分の名前をインジェ・メメッドに変えたそうだ。毎日インジェ・メメッドに、何千という者が義賊になるために申し出ていたそうだ。そうして、同じ母親から生まれたかのようにそれぞれそっくりな者を７名集めては、メメッド団をつくっているそうだ。山はメメッドの団でいっぱいだそうだ。（Ⅳ:169）

メメッドの馬とされる馬が殺されると、村人は悲しむ。メメッドと褐色の馬は一心同体と考えられていた。馬に対する村人の反応もメメッドに対する村人の反応と同じである。

村人たちは夕方まで、グループで、後からは 1 人、２人と馬の前にやってきて、しばらく呆然とし、悲しみ、畏敬し、しばらく馬の死体から目を離せないで、後に

はさっさと馬から離れて、町や村へ帰っていった。村人たちや町の者たちの死んだ馬への訪問は夜遅くまで続いた。（Ⅳ:215）

次の日の朝、馬のいななきが鳴り響いた。町の者たちが馬の死体のあった橋の下へ行ってみると、馬はおらず、風が吹いていた。馬が生き返ったと信じた町人たちは喜ぶ。

その日、町はどんな日よりもずっと活気付いていた。町の者たち、老いも若きも、子供も義賊も広場に集まってきて、盛大なお祭り騒ぎとなっていた。（Ⅳ:216）

ケルティシュ・アリ[59]は村々でメメッドと名乗る若者に、拷問を加えている。

「名前は？」と聞いた。
「名前、名前っていったら、メメッドだ」
「メメッドだって、他に名前はないのか？」
「ない」
「そいつをやってしまえ」
ジャンダルマは、若者をゴザに寝かし、叩き始め、顔が真っ青になるまで殴りつづけた。ケルティシュ・アリは足裏を殴られる人間の顔が青くなることが、どういうことか分かっていた。
「おまえの名前は？」、そう尋ねた。
若者は聞かれるとすぐに：
「メメッド」、と言った。
再び殴り始めた。若者からどんなに小さな「あぁ」も、唸り声も、どんな声も発せられなかった。
ケルティシュ・アリはしばらくすると、鉄は熱いうちに打て、たたくことも頃合いが必要だ、と再び若者にこう尋ねた：
「おまえの名前は？」
「メメッド」

[59] 憲兵。拷問の係。

今回はケルティシュ・アリ自身が殴り始めた、殴ることに関しては職人で、殴ることに馴れた彼の手でもってさえも、若者から声を出させることはできなかった。（ケルティシュ・アリは）今度は懇願し始めた、金持ちにしてやる、結婚させてやると言い始めた。

「おまえの名前は？」

若者から、もはや声は出なかった、ただ唇の動きから理解できた。

「メメッド」

また再び殴り、尋ねた。殴り、尋ねた。

〔中略〕

ケルティシュ・アリは、この後若者たちを三日三晩殴った。何をしても、何をもってしても、彼らを降伏させることはできなかった。今にも死にそうな若者さえも、名前はメメッドだ、そう言った。この若者たちの頑なさにケルティシュ・アリは驚いた。〔中略〕殴られ、尿を漏らし、濡れたまま放置されたとしても、彼らの口からはメメッド以外の言葉は出てこなかった。（Ⅳ:274-275）

メメッドは再び義賊となりフェルハット・ホジャの団に加わる。彼らがイェルプナル村やってくることを聞いた村人たちとこの村のメメッド団が彼らを歓迎する。

彼らが村にやってきたとき、村の広場では大勢の村人はまるで神聖な場所にいるかのように静かに、メメッドの方をじっと見て、彼らを迎えた。メメッドはというと、恥かしそうに下を向き、右手を胸にあて村人たちに挨拶をした。（Ⅳ:340）

アリフ・サイム・ベイはメメッドを捕まえるため、昔チュクロヴァで名をはせた義賊バイラムオールを呼ぶ。バイラムオールは、ベイにメメッドを捕まえると言ったものの、実際にはその勇気が出せない。そのうち、インジェ・メメッドの噂が立った土地とは反対の方へ逃げるようになる。

彼が、そうする度に村人たちはバイラムオールに関心を示すようになり、彼を行く先々でズルナやハライでもって迎え、村の敷地内ではバイラムオールに敬意を示し、素晴らしいお祭りや宴会を開いていた。（Ⅳ:433）

村人は、インジェ・メメッドの味方につく者にも敬意を示し、その行為を祝った。

カラフルトゥナ[60]の攻撃から逃げてきたメメッドたちを、デリッキタシュ村の村人たちは村の近くのカレ洞窟へかくまう。

食事が済むと村人たちは：

「ここは安全な場所。あなた方がここに居ることは私たちのほかには誰も知らない。何か必要なものがあったら、ハリルがもってくるよ。」

「どうもありがとう、みんな」とメメッドは言った。「もってきてもらえるものは何でも歓迎するよ」

村人たちは、それぞれ大きなマツの木の枝を折って、足跡が分からないようにと、足跡を掃きながら、雪の嵐の中へ飛び出した。この雪の嵐の中では、足跡を掃かなくても、足跡はすぐに消えてしまっただろうに。

〔中略〕

若者たちはインジェ・メメッドの手助けにやっていた者たちが戻ってくるのを心待ちにしていた。メメッドたちの状況を把握すると喜んだ。山から戻ってきた村人たちは徒党（チェテ）をどこに隠したのかは誰にも話さなかった。誰一人として、徒党がどこにいるのかは尋ねなかった。なぜなら、みんな、この雪のなか彼らがどこに避難できるかは分かっていたからだ。（Ⅳ:532）

メメッドを捕らえようと、村々を荒らし、村人を追い出しているアリフ・サイム・ベイがメメッドによって討たれると、村人たちは祝宴を開く。

そして、ディケンリデュズを埋め尽くした村人の群集は、メメッドの知らせを聞いたようで、どんどん増えていた。バイラム、ジュメッキ、他のダウル奏者、ズルナ奏者がやってきていた。一瞬にして灰色のイバラや、リンボウ、エニシダにアザミが山のように積み上げられた。ヒュル・アナはその山に近づき火を付けた。アプタル・バイラムや他のダウル奏者、ズルナ奏者は山の上に飛び乗り、炎の中で踊っ

60 アリフ・サイム・ベイも嫉妬するくらいの影響力の持ち主。

た、群集全体も彼らとともに踊った。炎が山の一面を覆うと、山から下り、群集にまざった。群集全体は大きなハライを踊り始めた。ハライが終わると、歓喜の歌を歌い始めた。世界は歓喜の竜巻に取り込まれ、歓喜の竜巻のなかで回った。炎はイバラの山から平原へと飛んでいった。乾燥した灰色のイバラは平原を端から端まで一瞬にして炎に巻き込まれた。炎は平原全域、中腹、谷を飲み込みながら流れていった。炎の赤さは紫色の山を照らし、山を明るくさせ、揺らした。

トロスの山々の頂上では、日が昇るずいぶん前から、光がさし、火打ち石から白い頂まで光が差す。（Ⅳ:605）

## 結論

『インジェ・メメッド』を論じるにあたり、ヤシャル・ケマルが「選ばれし者」インジェ・メメッドをどう描いたかにテーマを置いた。第 3 章ではメメッドと村人に注目し、メメッドの心理と、村人のインジェ・メメッドへの視線を順に追った。それではメメッドの心理と村人の視線は第 1 巻から第 4 巻通してどうであったか、ここにまとめてみたい。

まず、村人のインジェ・メメッドへの視線をまとめる。第 1 巻では権力者の不正を正してくれるインジェ・メメッド像が出来上がる。象徴的な場面は第 1 巻の最終章に見ることができる。恩赦を受けて山を下りてきたメメッドを、村人は歓迎しない。村人はただ黙ってメメッドを見つめる。村人たちにとって、メメッドが山を下りるということは、アーの不正を正す者がいなくなるということ、自分たちの生活がまたアーが大手を振っていたころのものに戻ってしまうことを意味している。そのため、メメッドが山を下りることを村人は歓迎できないのである。しかし、ヒュル・アナに一喝されたメメッドがアブディー・アーを殺害し山へと消えると、村は一転歓喜する。インジェ・メメッドはやはり、私たち村人を守ってくれる存在だったのだ、アブディー・アーがいなくなればもう不正はない、そう歓喜の祝いをあげるのである。この場面において、村人にとってのインジェ・メメッドは、山で恐れられる存在、そして村の不正を正してくれる存在として確立する。その後第 2 巻、第 3 巻、第 4 巻において村人は、このインジェ・メメッドを崇拝し続ける。

第 2 巻において、ワイワイ村の村人たちはインジェ・メメッドを「彼」だとか「ハヤブサ」だとか呼びはじめる。こうすることで、インジェ・メメッドを守り、自分たちにとっての特別な存在としている。村では、インジェ・メメッドの遊びが生まれ、民謡や挽歌が生まれた。メメッドが実際に活躍していなくても、インジェ・メメッドがチュクロヴァ各地で活躍する知らせが村々に届いた。おそらく、村人の誰かが作ったであろう作り物の英雄伝である。しかし、村人たちにとって、事の真相は重要ではなく、インジェ・メメッドが山で活躍しているという知らせが、途切れることなく届くことが重要であった。インジェ・メメッドの噂が届くだけで、村は歓喜した。村人たちは、インジェ・メメッドの場所を知らせろと脅され殴られようと、教えることはなかった。

第 3 巻においては、インジェ・メメッドが死んだという知らせ（実際にはインジェ・メメッドは死んでいなかったが）に村々は悲しみに暮れる。女たちは、これまで義賊に対しては歌われることのなかった挽歌を歌う。そして、インジェ・メメッドがマフムート・ア

ーに捕らえられたことを知ると、女たちはインジェ・メメッドを助け出す。インジェ・メメッドが自分たちの村で捕らえられ、首を吊られるなんて、村の恥だと言って。

第4巻では、村の男たちは、次々と自分の名前をメメッドと変え、義賊となる。そうして同じよう容姿をした若者7名を集め、メメッド団を形成していた。山々はこのメメッド団で溢れていた。インジェ・メメッドを捕らえることにやっきになっていた権力者たちは、インジェ・メメッドの馬はその主人であるインジェ・メメッドと一心同体だからと、馬に懸賞金をかけ探させる。インジェ・メメッドの馬が死んでいるのを発見した、同じく馬とインジェ・メメッドは一心同体だと信じている村人は（馬は後で生き返るが）、インジェ・メメッドに対して歌ったように、この馬に対しても挽歌を歌う。憲兵のケルティシュ・アリは村々で暴行を加えはじめる。メメッド団の若者は、名前を聞かれても「メメッド」という以外に何も答えず、ケルティシュ・アリによって殴り殺されていく。村人のインジェ・メメッドに対する愛情は失われることなく、最後まで続く。

次にメメッドの心理の変化をまとめてみる。第1巻では母親の死とハッチェが投獄されたことからメメッドは権力者アブディー・アーに強い恨みを抱く。この個人的な恨みに加え、アブディー・アーが村人に繰り返す不正にも憤りを感じはじめる。第1巻の最終章でメメッドはアブディー・アーを殺害するが、そのときのメメッドの心理が「選ばれし者」インジェ・メメッドのはじまりと考えられる。恩赦を受け、山を下りたメメッドは、ヒュル・アナから一喝され、村人からは冷たい視線を浴びる。メメッドは、自身に向けられた期待と、誰も自分が山を下りることを受け入れてくれないことに気付くのである。この孤独感に第2巻の最初では悩むようになる。

第2巻では、ひとりぼっちになってしまったこと、皆がおそれる権力者アブディー・アーを殺害したことで自分も死の危険にさらされていることを理解し、メメッドは混乱する。自分の居場所はないと孤独感に襲われたかと思うと、望郷の思いに駆られ、どうせ死ぬのならば故郷を見ておきたいと村を訪ねる。しかし、村に立ち寄ったメメッドは、自分がいない3年間の間に、死んだアブディー・アーの代わりに彼の兄弟であるケル・ハムザが村にやってきたこと、そしてハムザはアブディーよりもひどい不正を繰り返していることを知る。この事実を知ったメメッドは一気に自分を見失ってしまう。「アブディーは去り、ハムザがやってきた」と、自分がやったことは何の意味も成さないのではないかという無力感に苛まれはじめる。

第3巻においても「アブディーは去り、ハムザがやってきた」に表される無力感は続き、

メメッドは義賊をやっていくことに意味を見出せなくなる。そんなとき、「ひとりのインジェ・メメッドがいなくなっても、あらたにインジェ・メメッドはやってくる」とバッタル・アーに言われ、メメッドはインジェ・メメッドであることを放棄する。

第4巻では、メメッドは地中海の町で、セイランやヒュル・アナと一緒に、夢にまでみた普通の生活を始める。しかし、メメッドの前に度々男の幻覚が現れるようになる。メメッドはこの男の幻覚に悩まされるようになり、自分を失っていく。孤独を感じ、彷徨いつづける。町には馴染めなかったメメッドであったが、唯一教師ゼキ・ネジャドとは交流をもっていた。彼が権力者シャキル・ベイによって殺害されたこと、村人がひどい不正を受けていることを聞いたメメッドは、我を取り戻す。自分はインジェ・メメッドであってこそ生かされていることに、メメッドが気付く瞬間である。メメッドはシャキル・ベイを討ち、再び山賊となる。そうして、インジェ・メメッドを捕まえようと村々を荒らし、村人を村から追い出しているアリフ・サイム・ベイを殺害する。

ヤシャル・ケマルは、村人に関しては一貫して、変わらないメメッドへの視線（崇拝心）を持たせた。構成の要素でも挙げた、物語の終わりに見られる村人による祝宴のシーン、また物語上に現れる村人のメメッドに対する視線(崇拝心)は第4巻の終わりまで続いた。インジェ・メメッドに向けられる、一貫した群集としての村人の視線（崇拝心）は、「選ばれし者」を描く上で欠かせなかったといえる。その答えは作品中のバッタル・アーがインジェ・メメッドに向けて言った言葉にも見つけることができる。「人の心の中には選ばれし者の狼、インジェ・メメッドやキョロールの狼がある。キョロールが去り、インジェ・メメッドがやってきた。人の心にこの狼がある限り、人に何が起ころうと負けることはない。おまえは人の心にある狼だ、したいようにしなさい、どこへでも行きなさい。人の心の中にあるこの狼がなくなるとは、人間性が人間性ではなくなるということ。人は、心にあるこの狼を失くすことなく、永遠にその目となり、その心臓となり見守る。その狼は人の頚動脈、鼓動する心臓だ。おまえの中にある狼も、人間性のこの狼だ」（Ⅲ：380）

つまり、メメッドは村人の中の狼。村人は心の中にあるインジェ・メメッドを失くすことなく、永遠にその目となり、その心臓となり見守る。その狼であるメメッドは村人にとっての頚動脈であり心臓である。村人は心の中のインジェ・メメッドを失っては生きることができない。インジェ・メメッドはその登場から、村人の頚動脈や心臓として定められていたのである。ヤシャル・ケマルは、村人の一貫したメメッドへの視線（崇拝心）を描くことで、メメッドが「選ばれし者」であることを示そうとした。

一方、メメッドについては、彼に幾度の困難を与えながら、彼が「選ばれし者」としての運命を受け入れる過程を描いた。その過程では、構成の意図にあげた自然描写はメメッドの心理を表す場面で効果的に使われている。また、メメッドの物語章において心理が表れる主要な部分を取り上げてみたが、まるで心理小説の様相を呈していることもみてとれる。「選ばれし者」の心理を深く追求したかったヤシャル・ケマルが意図していたところである。特に、第 2 巻でメメッドが孤独を感じ彷徨っている場面と、第 4 巻で男の幻覚に悩まされる場面において、それは顕著であった。

ヤシャル・ケマルは第 4 巻で、メメッドがインジェ・メメッドを受け入れる過程の最終段階として男の幻覚を登場させる。ここでのヤシャル・ケマルの意図ははっきりと理解できる。ヤシャル・ケマルはここで、メメッドに男を追わせながら、実はメメッドに自分自身を追わせているのである。「選ばれし者」インジェ・メメッドを受け入れられないでいたメメッドが、自らインジェ・メメッドに近づく逆転の部分である。第 2 巻、第 3 巻を通して、メメッドは言いようのない不安と孤独を感じてきた。しかし、第 4 巻において、メメッドは義賊をやめ普通の生活をおくる過程で、孤独の真相を男の存在に発見する。自身が抱く孤独は、インジェ・メメッドという「選ばれし者」が望む生き方を自身が受け入れていないためだと認識するのだ。物語で「一度インジェ・メメッドになった者は、インジェ・メメッドから逃れることはできない」というくだりが登場する。そのくだりの通り、一度インジェ・メメッドを心に宿らせたものは、インジェ・メメッドを健全に生かせない限り、苦悩し、その責め苦を背負う存在となるのである。

ヤシャル・ケマルはインジェ・メメッドを「選ばれし者」として、このように描いたのだ。

## 参考文献

### 外国語語文献

#### 著作

Yaşar Kemal. *İnce Memed1*. İstanbul: Adam Yayınları, 2002　(Onikinci Basımı)

—. *İnce Memed2*. İstanbul: Adam Yayınları, 2002　(Dokuzuncu Basımı)

—. *İnce Memed3*. İstanbul: Adam Yayınları, 2003 (Dokuzuncu Basımı)

—. *İnce Memed4*. İstanbul: Adam Yayınları, 2003 (Onuncu Basımı)

#### 関連書・研究書

Ali Püsküllüoğlu. *Yaşar Kemal Sözlüğü*. İstanbul: Toros Yayınları, 1994

Alpay Kabacalı. *Bir Destan Rüzgarı*. İstanbul: Sel Yayıncılık, 1997

Altın Gökalp(et al. Eds.). *Yaşar Kemali Okumak.* İstanbul: Adam Yayınları, 1999

Berna Moran. *Türk Romanında Eleştirel Bir Bakış2*. İstanbul: İletişim Yayınları, 1990

Fethi Naci. *Yaşar Kemal'in Romancılığı*, İstanbul: Adam Yayınları, 1998

Nedim Gürsel. *Bir Geçiş Dönemi Romancısı*. İstanbul: Everest Yayınları, 2000

Osman Şahin. *Geniş Bir Nehrin Akışı*. İstanbul: Can Yayınları, 2004

Süha Oğuzertem(Ed.). *Geçmişten Geleceğe Yaşar Kemal: Bilkent Üniversitesi Türk Edebiyatı Merkezi Uluslararası Yaşar Kemal Sempozyumu*. İstanbul: Adam Yayınları, 2003

Yaşar Kemal. *Yaşar Kemal Kendini Anlatıyor: Alain Bosquet ile Görüşmeler*. İstanbul: Adam Yayınları, 2003

*Tanzimat'tan Bugüne Edebiyatçılar Ansiklopedisi.* İstanbul: Yapı Kredi Yayınları, 2001

*Edebiyât: The Journal of Middle Eastern Literatures.* 5:1-2. Middle East Center, University of Pennsylvania, 1980

### 日本語文献

保科眞一『トルコ近代文学の歩み』叢文社、2001 年

小山晧一郎「アナトリアの山賊（eşkiya）―『インジェ・メメット』（*İnce Memed*）をめぐって―」『内陸アジア・西アジアの社会と文化』護雅夫編　山川出版社、1983 年、717－734 頁
『新明解国語辞典』、第三版、三省堂、1987 年